

ミュージズ NO. 29 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行: 2012年10月

編集: 山辺昌彦、山根和代、安齋育郎

翻訳: 増田妃早子・山根和代

イラスト: 戸崎恵理子

事務局: 戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所: 〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

滋賀県立平和祈念館: 滋賀

モノと記憶の継承: 収集された資料や当時の体験談を通して、戦争体験者それぞれの思いや願いを利用者一人ひとりが感じられるようにします。

自らできることのきっかけづくり: 資料と多様な学習プログラムを組み合わせることで、双方向の学びを導き、平和への思いが深まるきっかけをつくります。

県民参加型の運営: 幅広い県民が参加し、展示や様々な事業を通して、人と人のつながりが生まれ、現在や未来に向けた新たな行動が生まれることを目指します。

〒527-0157 東近江市下中野町431番地

Tel: 0749-46-0300 Fax: 0749-46-0350

E-mail: heiwa@pref.shiga.lg.jp

5周年を迎えた「山梨・平和の港」

山梨平和ミュージアム 浅川 保

「伝えたい戦争の記憶」という多くの市民の思いが結集し、2007年5月、甲府市朝気に山梨平和ミュージアム—石橋湛山記念館—が開館して、5年経ちました。この間、甲府空襲・甲府連隊・戦時下の暮らし、石橋湛山の生涯と思想等の常設展示の他に、年2回、都合10回の企画展を開催、入館者は、8,200人を超えました。また、毎月1回、通算60回を超える講演会・シンポジウム等を行い、マスメディアにも数多く取り上げられてきました。

6月24日の5周年記念行事は、辻井喬氏を講師に迎え、会場一杯の150名が参加、盛況裡に終わりました。



erico

作家で経済人でもある辻井氏は「いま、日本のあり方を問う」という演題で、東日本大震災後の日本のあり方を問い、人間中心の再生・日本国憲法の独自性を世界に示せと語られました。

5周年を記念し、甲府連隊の歴史と戦場体験者の生々しい証言をまとめたブックレット3『甲府連隊の歴史と戦場の記憶』(300円)を刊行、好評発売中です。また、この間、若者を中心に石橋湛山や平和への関心を高めようとして創設、全国に募集(中高生の部、大学生以上の一般の部の論文募集)を呼びかけてきた石橋湛山平和賞ですが、9月末に締め切り、現在、井出孫六氏を選考委員長に選考を進めており、12月には発表の予定です。ご期待下さい。

企画展ですが、「寄贈資料が語る15年戦争」展が、8月末に終わり、現在、企画展「日中国交正常化40年と石橋湛山」を開催中です。日中国交回復40年、ますます強まる日中間のつながり、そして、課題を抱える中で、2度にわたる訪中、周恩来との共同声明など、日中国交回復に尽力した石橋湛山の活動・歴史的役割を考える展示です(来年4月末まで)。関心のある方、ご覧下さい。

『NPO・中帰連平和記念館』近況報告

事務局・理事 芹沢昇雄

3月末に『撫順戦犯管理所』の張継承所長ら5人が初来日し記念館を始め、首都圏や山陰地域のご存命の「中帰連」の皆さんや、首都圏支部などと面談・交流しました。「中帰連」元副会長の大河原孝一さん(札幌)や、元事務局長の高橋哲郎さん(東京)はご健在ですが、皆さんほぼ90歳を超え証言をお願いすることは殆ど困難な状況に入っております。

中国で『中帰連研究会』が設立され今秋シンポが開かれます。日本側も「記念館」内の組織として学者や会員を含め『中帰連研究会』(仮称)を設置しました。また、年4回「理事会」を開き、その午後は『学習・研究会』を開き前回は徐京植さんに、今回は石田隆至さん(亜細亜大、明治学院大)に講演をお願いしました。

過日、ドイツのベルリン自由大学のペトラ博士が「中帰連」研究のため来日・来館しましたが、その研究結果がドイツ語で出版され記念館に寄贈されました。また、同様に米から取材に来たダウズ教授の研究も近いうちハーバード大学から出版予定です。

亡くなった軍医で自らの「生体解剖」を証言してきた湯浅謙さんや、「国際女性戦犯法廷」で加害証言(NHKがカット)をした金子安次さんなどのご遺族から資料(遺品)の寄贈を戴いております。また、軍事評論家の治夫さんや、映画監督の高岩仁さんなどからも資料提供を戴いておりますが、膨大な資料に対し作業人数が足りず、なかなか整理が進んでおりません。

NHKその他にも資料提供しております。

第五福竜丸展示館(公財・第五福竜丸平和協会)

戦後の核兵器開発のもとで核実験場とされたマーシャル諸島。ビキニ環礁での1954年3月1日のブラボー水爆実験で被ばくしたロンゲラップ環礁の人びとが、1985年に島を離れて以来、27年ぶりに帰島します。実験当事者のアメリカは、1990年代後半から、住民が暮らしていたロンゲラップ本島を除染し、いま50戸ほどの住宅を建設し、帰島勧告をだしています。これは強制ではないといいますが、実行されなければ今後の補償を打ち切ると通告しています。

いま、帰る人、帰らない人、帰れない人、様々な選択を迫られるなかで、島の人たちの声と表情、核実験開始から60年余、放射能禍に見舞われ、健康も暮らしも土地も奪われた人びとの長い道のりをたどります。企画展「マーシャルは、いま一故郷への道」を10月2日から2013年3月24日まで開催します。イベント情報などはHPをご覧ください。

アクティブ・ミュージアム「わたちの戦争と平和資料館」(wam)

館長 池田恵理子

wamでは2012年6月23日から、第10回特別展『軍隊は女性を守らない～沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』を開催中です。琉球王国時代から戦中・戦後の沖縄史と慰安所の実態を女性の視点から見直すとともに、今も続く米軍地下での米兵による性暴力と女性たちの闘いを伝えようと、本土「復帰」から40年の今年、沖縄と東京での同時開催にこぎつけました。長年沖縄で、「慰安婦」問題や女性への暴力、平和運動、女性史研究などに取り組んできた女性たちが「沖縄戦と『慰安婦』展実行委員会」を立ち上げたのは、1年ほど前。このメンバーとwamが緊密な連携をとって展示パネルを2セット共同制作し、沖縄では各地で巡回展を、wamでは1年間の常設展を始めたのです。

アジア太平洋戦争中、沖縄は国内で唯一の地上戦が行われた戦場となり、50万の住民のうち約15万人が犠牲になりました。日本軍は沖縄全島を要塞化して部隊を配置、少年少女から老人までの総動員体制を敷き、最後には人々を「集団自決」にまで追い込んでいます。そして日本軍が駐屯した地域にはくまなく慰安所を設置し、その数は145ヵ所にものぼりました。「慰安婦」にされたのは沖縄の遊廓や朝鮮半島、九州などで集められた女性たちですが、慰安所の実態は半世紀近くの間、封印されてきました。

今回、1990年代から蓄積されてきた聞き取り調査や発掘資料を活かした沖縄で初めての「慰安婦」展が実現すると、予想をはるかに超えた反響を呼びました。会場には大勢の熱心な来館者が殺到し、地元メディアにも大きく取り上げられて、慰安所に関する新たな証言も寄せられています。米兵による性暴力事件は、4mほどの壁一面を300個余りの卵型の囲みで埋め、その1個ずつに被害女性が一人称で被害事実を語り、殺された女

性場合は三人称で記す…という形で表現しました。この壁の迫力には凄まじいものがあり、食い入るように読む人たちが絶えません。

東京のwamの沖縄展にも来館者が多く、強い手応えを感じています。この背景には、昨年後半から日本に「慰安婦」問題の解決を迫る韓国政府と、「すでに解決済み」と主張する日本政府との応酬があって国際的な注目を集めていることや、米軍のオスプレイ配備をめぐって、常に犠牲を強いられてきた沖縄への関心が高まっていることもあるでしょう。ただそれだけではなく、日本国内にもこれだけ大規模な「慰安婦」被害があったことや、米兵による性暴力事件のおびただしさ・生々しさが大きな衝撃を与えているのだと思います。これは必死に沖縄戦を学びながら、沖縄の仲間たちと共同作業を続けてきたwamの私たちの実感でもありました。沖縄を知れば知るほど、「軍隊は女性を守らない」という現実を突き付けられました。秋以降はセミナーやビデオ上映会も予定しています。

立命館大学国際平和ミュージアムの2012年度前半期の活動報告:京都市

立命館大学国際平和ミュージアム
教育文化事業課 鳥井真木

2012年4月、4代目の館長にモンテ・カセム(立命館副総長、前立命館アジア太平洋大学学長)が就任しました。

立命館大学国際平和ミュージアムは、「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはぐくむ」という理念に基づき、1992年5月19日に世界で最初の大学立の平和博物館として設立され、今年開設20年を迎えました。記念事業として、記念式典(5月19日)を挙行し、記念誌『国際平和ミュージアムの歩み:過去・現在、そして未来』本編、資料編を発行しました。また後期には、平和学術シンポジウム(11月30日)や学生平和フォーラムの開催を予定しています。さらには、開設20周年記念事業を踏まえて、将来の展開を見据えたミュージアムの中期計画を検討している最中です。

以下に、開設20周年を記念して行われたいくつかの事業・展示を紹介します。

【特別展】

- 「放射能と人類の未来」5月15日～7月27日
公開記念講演:安齋育郎(名誉館長) 6/10「放射能リテラシーのすすめ」、豊田直巳(フォト・ジャーナリスト) 7/14「イラクからフクシマへ～放射能汚染地帯を歩いて」

【ミニ企画展】

- 第73回:「わたしたちにできることー震災1年を振り返って」本学学生を中心としたボランティア団体の活動の様子を3本展示。4月20日～5月20日(1)スリランカからの贈り物ー平和の祈りの木を咲かせよう(Happy Factory)(2)震災から1年。気仙沼から同世代へ(シャンティ国際ボランティア会)(3)被災者×ボランティア?いいえ、宮城のおっちゃん、おばちゃん、こども×京都の学生(国際ボランティア学生協会)
- 第74回:夏休み企画「紙芝居」7月21日～8月26日 収蔵資料のなかから、国策紙芝居を展示

【立命館土曜講座】

● 第 3025 回:過去・現在・未来～人と人がつながる「平和教育」～小林多喜二・山本宣治・内山完造の妻みきのことなど～ 本庄豊(立命館宇治校教諭)

● 第 3026 回:平和の概念と平和教育のあり方ー国際平和ミュージアム 20 年の軌跡 安齋育郎(名誉館長)

【その他】

● 第 32 回平和のための京都の戦争展(実行委員会) 7月 31 日～8月 6 日

また、9 月 21 日付で、領土問題を契機とする日中間の関係に関する以下の見解を館長・名誉館長名で発表しました。

日中の友好関係の発展にむけて -立命館大学国際平和ミュージアム 館長・名誉館長の見解-

すでに多くの報道で伝えられている通り、現在、「尖閣諸島(魚釣島)」の領土所有問題に端を発した一連の出来事により、日本と中国の友好関係に憂慮すべき事態が生じています。

領土問題は、日中両国間で歴史的な経緯を踏まえた慎重で冷静な議論による合意形成がなされるべきものです。当事国双方が正当と認める手続きを踏まえ、合意形成のための誠実かつ着実な努力を持続することなく唐突な政治行動に走ることは、当事国間の対立を深め、紛争の暴力化、長期化をもたらす原因となりかねません。

日中国交回復から 40 年の間、民間レベルで日本と中国の友好関係を築く試みは粘り強く続けられてきました。グローバル化が進行する現代において、経済や文化ならびに学術研究の交流はすでに国境を越えた連帯を生み出しています。立命館大学も「キャンパスアジア・プログラム」をはじめ、数多くの留学プログラムの創造や研究交流を行ってきました。日中両国の心ある多くの人々の努力によって築かれてきた友好的な信頼関係が今回の事件で損なわれることは、何としても避けねばなりません。

立命館大学国際平和ミュージアムは、「過去と誠実に向き合う」という理念から、15 年戦争中の日本による加害責任についても展示し、中国南京市の「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞纪念馆」とも友好的な提携を結んできました。アジアの平和と友好のためには、日本政府および日本人は、日本がかつて行なった侵略戦争の事実に向き合い、その反省の上にアジア諸国との相互理解の道を開かねばなりません。

立命館大学国際平和ミュージアムは、領土問題に端を発する今回の日中間の一連の事態が悪化することに懸念を表明し、日中両国政府が国際平和の見地にもとづいて緊張関係をやわらげるための対話を継続することにより、未来の世代が平和で友好的な新しいアジアで活躍することができることを希望します。

2012 年 9 月 21 日(世界平和デー)

立命館大学国際平和ミュージアム
館長 モンテ・カセム

名誉館長 安齋 育郎

平和資料館・草の家:高知

事務局員 中内愛(まな)

現在、草の家では「2012 ピースウエイブ in こうち」を開催中です。

今年も多くの皆様のご支援、ご協力のもと、6月23日の「ピースアクション・ユニセフのつどい」からスタートし、7月2日から7月31日まで「第30回平和七夕まつり」、7月3日から8日まで「第34回戦争と平和を考える資料展」、その後も「第29回平和映画祭」、「第29回平和美術展」、「第29回反核平和コンサート」、「灯ろう流し」等々10余の行事を無事開催し、残すところ、8月19日の「第6回掩体コンサート」のみとなりました。

草の家は創立以来「加害」、「被害」、「抵抗」の三つを展示の柱としてきましたが、その内の「抵抗」では、高知の反戦詩人・榎村浩(まきむらこう)のコーナーを設置しています。榎村浩が生まれたのは1912年、生きた時代はまさに激動の時代でした。国民は絶対主義的天皇制に支配され、軍国主義の名のもとに、国家によって言論の自由を奪われ、反対する者は厳しく弾圧されました。そんな時代の中、榎村浩は労働運動に身を投じ、1931年に満州事変が勃発し、日本の侵略戦争が始まるといち早くこれに反対する運動に立ち上がり、詩「生ける銃架(じゅうか)」や、「間島(かんとう) パルチザンの歌」などを発表しました。しかし、当時の日本の法律であった治安維持法によって逮捕され、ひどい拷問の末に重病釈放、26歳という若さでこの世を去りました。

今年、その榎村浩、本名・吉田豊道(よしだとよみち)の生誕100年目の年です。その記念事業として、今年5月に草の家ブックレット13号『榎村浩に会いに…』(2012.5.1発行、500円)を発行しました。また、6月2日に市内高知城ホールにて「榎村浩生誕100周年記念のつどい」を開き、以前榎村のことを訪ねて遥々韓国から来られた戸田郁子さん(作家・翻訳家)を招いての講演会と、4つの詩の朗読・舞踏などをして、会場には約200人が来場しました。彼がもし今生きていれば100歳、決して有り得ない話ではない「あの時代」と今との間に流れる月日の浅さを感じます。

関連して9月1日から7日にかけて、榎村が詩に詠んだ中国の「間島を訪ねる旅」を企画・予定しています。

岡まさはる記念長崎平和資料館

2012 年上半期の主な活動をお知らせします。

理事長・高實康稔

- ・機関誌「西坂だより」第 64 号を発行(1月 1 日付)。
- ・「日本の近現代史」連続公開市民講座(第 2 期)の第 5 ～ 7 回を好評のうちに終了。第 5 回(1月 8 日):「大正デモクラシーと朝鮮・中国の独立運動」(担当、門更月)、第 6 回(2月 12 日):「宗教は良薬か毒薬か」(担当、原和人)、第 7 回(3月 12 日):「日本の近代とメディア」(担当、草野十四朗)。
- ・河村たかし名古屋市長に対し、南京大屠殺に関する不当発言の撤回を書面(3月 12 日付)に関連資料(村瀬守保『私の中国従軍戦線』日本機関紙出

版センター)を添えて要求。

- ・機関誌「西坂だより」第 65 号を発行(4月1日付)。
- ・九州労働金庫より「NPO 助成」の対象に選ばれ、30 万円を授与された(4月21日)。
- ・毎夏、南京へ学生を派遣する《日中友好・希望の翼》(第 10 回)と会員の訪中団(第 12 次)を募集(5月末)。会員 5 名の応募があったが、学生の実績は今回もなく残念であった。

<http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen>

ひめゆり平和祈念資料館

学芸員 仲田晃子

かねてより制作をすすめてきたアニメ「ひめゆり」が完成し、6月23日の慰霊の日に、はじめての上映を行うことができました。当館では、いろいろな方法で沖縄戦の体験を伝えてきましたが、子どもたちに伝えることが難しいということが長年の課題となっていました。子どもたちに少しでも理解して欲しいと制作をすすめてきたものです。夏休み(8月1日～15日)には、元ひめゆり学徒の戦争体験講話と合わせて、一般の入館者向けに上映しましたが、子どもたちだけでなく、大人の方にもひめゆりの体験がよく理解できたとお声をいただいています。今後は、希望する団体向けに館内の多目的ホールで上映していく予定です。

また、6月23日に、元ひめゆり学徒の証言集、『生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ—』を刊行しました。沖縄戦を生き残ったひめゆり学徒が米軍に収容されてから、家族に再会するまでの短い間の体験をまとめたものです。生き残ったひめゆり学徒たちにとって、生きて米軍に収容されることは考えてもみないことでした。それぞれの手記は、生き残った彼女たちが、どのような困難や心身の傷を抱えて生きることになったのかを伝えています。沖縄戦で生き残るとは、どのような経験であったのか、ぜひ、多くの方に読んでいただきたいと思えます。

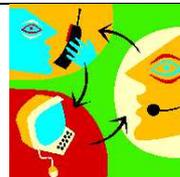
平和教育の一方法論としての脱植民地化の実践—オキスタ 107 監修による「うないミュージアム」について

赤嶺 ゆかり
沖縄国際大学大学非常勤講師
yukari.akamine@gmail.com

沖縄における「脱植民地化」とは何でしょうか。ハワイアンは祖先や大地と繋がる社会の一員としての立ち位置から責任を果たすことであり、マオリは自らの世界観を中心化し、主体となって文化運動をエンパワーすることだと定義します。沖縄の歴史を振り返ると、主体として植民地主義へ加担させられてきた事実もあります。だからこそ、立ち位置の確認と、過去と今をつなぐ時間と空間の関係性をより重視する事であると考え、筆者が所属するオキスタ 107 (研究会)では、23 団体からなる活動パネル展「うないミュージアム」(1985 年から今も続く沖縄の女性による平和と人権のイベント「うないフェスティバル」の開催期間中に行われた)を脱植民地化の視点でプロデュースしました。壁一面の鏡の中央に教科書問題や基地および開発による自然破壊の状況を表す写真をコラージュした作品を張り付け問題提起する空間を作りあげました。額縁となった鏡には作品を観る主体として映し出された自分自身をさらに観る(客

体化する)という行為から、どの立ち位置でこの問題を捉えているのかを考えさせるのが狙いです。人権問題で抑圧されたハワイアンやマオリの平和を願う証言や写真を各団体のパネルと関連させて展示することにより、訪れた人たちが世界観を共有し、エンパワーされる空間を創りあげました。

市民ネットワークニュース



仙台市戦災復興記念館・宮城

2012 年度戦災復興展が 2012 年 7 月 6 日～16 日の会期で開催されました。戦災復興展は、仙台空襲のあった 7 月 10 日の前後に仙台市主催のもと、戦災復興記念館で毎年開催しています。今年も、仙台空襲や復興に関する写真と、戦時中の生活用品、遺品などの現物資料を展示していました。特に、戦前の空から見た仙台写真やアメリカ軍進駐の川内「CAMP SENDAI」の地図といった貴重な資料もありました。「宮城学院女子大学芸員課程企画展示」は現代の女学生から見た、戦時下女学生の生活に焦点を当てた展示でしたが、学芸員課程の実習の一環として学生が企画から展示作業まで協力しました。「仙台空襲犠牲者の氏名板を贈る会」から仙台市に寄贈された氏名板も展示していました。

2012 年 6 月 30 日には、イベントとして、要プロデュース・劇団仙台の主催により、「仙台空襲一孫たちへの伝言Ⅲ」が記念ホールで公演されました。2012 年 7 月 6 日～10 日の 1 階ロビーイベントとして、戦争体験発表会が開かれました。今回は、仙台戦災・復興と平和を語り継ぐ会のメンバー以外の市内在住戦争体験者も体験談を話しました。7 月 7 日の同時開催イベントは、仙台アートセンタ朗読の会「グループ風」主催により、朗読でつづる《鎮魂の譜》Vol.16「暮しの消る日」でした。7 月 8 日の同時開催イベントは、きらめく星のコンサート実行委員会主催による「第 15 回きらめく星のコンサート」とともに、ピースおさか主催による「歌と語りによる女の昭和戦記」があって、作詞家もず唱平氏の講演と歌手高橋樺子さんの歌と語りがありました。

Tel:022-263-6931 Fax:022-262-5465

<http://www.stks.city.sendai.jp/hito/WebPages/sisetu/sensai/index.html>

仙台市歴史民俗資料館・宮城

企画展「戦争と庶民の暮らし」が 2012 年 7 月 21 日～9 月 17 日の会期で開催されました。戦前の「軍都仙台」に焦点をあてて、戊辰戦争、徴兵制と仙台鎮台(のちの第二師団)、西南戦争、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、米軍占領期などをふまえて、仙台地方における戦争と庶民のかかわりについて紹介し考えていくものでした。

関連行事として、①「戦時資料にさわってみよう、読

んでみよう」が7月21日と9月8日・9日に、②子ども講座・紙芝居「青い目の人形ものがたり」が7月22日に、③「榴ヶ岡周辺の戦争遺跡を歩く」が8月14日・15日に、④講座「戦時体制下の東北振興政策」が9月1日に、それぞれ開かれました。
Tel:022-295-3956 Fax:022-257-6401
<http://www.city.sendai.jp/kyouiku/rekimin/>

福島県立博物館:会津若松市

ポイント展「風船爆弾の気球」が「常設展総合展示室 近・現代」で、2012年7月14日～8月31日の会期により開催されました。展示した資料は、「風船爆弾」の和紙製気球の下半分です。この資料は、寄託者の父親が、戦後、復員して職場復帰した際に、呉羽化学工業錦工場（現いわき市錦町）に廃棄してあったものです。『呉羽化学五十年史』によると、呉羽化学工業錦工場内の相模海軍工廠錦作業所では、貼り付けた和紙（美濃紙）にポリビニルアルコールを吹き付けた小型の気球を生産していました。この和紙製気球は、実際には作戦が中止された海軍用の小型気球の下半分と考えられます。今回は陸軍の風船爆弾関係資料も展示していました。陸軍気球連隊が、現いわき市勿来町で、「風船爆弾」を打ち上げていました。気球には高度調整用に砂を入れた布製の袋が吊り下げられていました。展示した袋は敗戦によって廃棄されたもので、寄贈者の父親は道具袋として利用していたそうです。展示資料の「風船爆弾の気球」は、いわき市の個人蔵で、福島県立博物館寄託、「風船爆弾の砂袋」はいわき市の個人の寄贈で、福島県立博物館蔵です。

Tel:0242-28-6000 Fax:0242-28-5986
<http://www.general-museum.fks.ed.jp/>

埼玉県平和資料館:東松山市

2011年度テーマ展Ⅲ「世界の平和と人々の幸せのためにーユネスコとその活動」がギャラリーコーナーとマルチ・ライブラリーで2012年2月25日～5月13日の会期により開催されました。戦後日本の国際平和貢献活動を分野別に紹介するテーマ展の5回目として、国連の専門機関であるユネスコ、国内・県内におけるユネスコ活動、民間ユネスコ活動を多角的に紹介するものでした。展示項目は「ユネスコとは?」「国内のユネスコ活動」「埼玉県におけるユネスコ活動」の3つです。

収蔵品展「絵双六に見る近代ー子どもたちの夢見た未来」が企画展示室で2012年3月17日～5月13日の会期により開催されました。子どもたちは絵双六で遊びながら多くの知識や教養を学び、未知の世界へのあこがれをつのらせました。戦時色の強まりとともに、双六も世相を反映して変化していきます。絵双六は戦後次第にその姿を消していきました。今回の展示では館蔵の絵双六を中心に、大正から昭和戦中期にかけての世相の移り変わりや、子どもたちを取り巻く世界などを紹介していました。展示資料リストを作成しています。

テーマ展「昭和20年の夏休みーある少女の見た戦争」が企画展示室で2012年7月14日～9月2日の会期により開催されました。1945年の夏。ある架空の少女の一日を取り上げ、当時の世相や暮らしの様子を示す資料を紹介し、子どもたちの視点から

見た戦争について考えるものです。家族、夏休み、国民学校、お手伝いとともに、熊谷空襲、戦後の変化も取り上げています。図録を刊行しています。

関連して、戦争を体験された方の話を伺い、戦争と平和について考える、戦時中の体験を聞く会が2012年8月12日に開かれ、内山美恵子さんが「戦時中の子どもたち」について話しました。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112
<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

蕨市歴史民俗資料館:埼玉

第23回平和祈念展「忘れ得ぬあの時ー戦中戦後の暮らし」が特別展示室で2012年7月28日～9月30日の会期により開催されました。戦争の悲劇を2度と繰り返さないためにも戦争という事実・記憶を伝えていき、平和の尊さを考えていくために、戦中・戦後に蕨市内で撮影された写真を中心に、当時の生活用品なども紹介しています。展示構成は、15年戦争の開幕、国家総動員、戦時体制と暮らし、蕨市の空襲被害、戦後の混乱で、出征関係、防空関係、代用品、空襲被災品、戦後直後の生活用品などのもの資料も展示していました。リーフレットの図録を刊行しています。

Tel:048-432-2477

<http://www.city.warabi.saitama.jp/hp/menu000000200/hpg000000120.htm>

東京空襲資料展:東京・墨田区

悲惨な史実を心に刻み、2度とこのような悲劇を繰り返さないよう未来に語り継ぐために、東京都は、空襲で亡くなられた方の遺品を中心に、焼夷弾などの兵器、防空ずきんやもんぺなどの空襲下の生活を物語る資料など空襲関連資料や、空襲下の東京を写した写真パネルを展示し、証言映像を放映する東京空襲資料展を、江戸東京博物館1階会議室で、2012年3月7日～11日の会期で開催しました。他に2会場でも会期をずらして開催しました。

復興記念館:東京・墨田区

(公財)東京都慰霊協会は、横網町公園内の東京都慰霊堂において、毎年3月10日に東京大空襲と関東大震災で亡くなられた方の春季慰霊大法要をおこなっています。今年も、この法要に合わせ、戦争中の悲惨な記憶を風化させることなく後世に平和の尊さを伝えるために、石川光陽撮影の「戦災写真パネル特別展」が復興記念館2階で2012年2月28日～3月18日の会期により開催されました。

Tel:03-3622-1208

<http://www.tokyoireikyokai.or.jp/kinenkan.html>

東京大空襲・戦災資料センター:江東区

2011年に寄贈された東方社撮影の写真資料について、空襲関係写真を先行して、2011年度は研究し、その歴史的意義と東方社新資料の歴史的価値を明らかにしました。荏原の民家、高井戸第

四国民学校、雙葉高等女学校、上智大学、慶応義塾大学、泉岳寺など、これまで写真が知られていなかったところの被害、中学生や大学生を動員した焼け跡の片付け、線路の復旧作業、焼け跡でのバラックの住宅・理髪店・花屋、焼け跡での葬儀、焼けた工場からの軍隊入隊者の見送り、中国の香港の被害などの、貴重な空襲の記録写真があることが分かりました。そこからアメリカ軍の爆撃が初期から軍事施設だけを狙う精密爆撃ではなく、無差別爆撃であることを示す新たな証拠が提供されました。空襲写真の撮影目的が、戦史の資料として空襲の実相を記録するとともに、対外宣伝に使うためでもあることも明らかになりました。最後に、従来東方社の写真は宣伝のための演出写真あるいは作画的な写真と考えられてきましたが、今回の新資料には記録性の高い写真も多く、東方社写真部の業績を再評価することができました。あわせて、館蔵の日本写真公社国防写真隊撮影写真の再整理と、新聞掲載の国防写真隊撮影などの写真の収集・分析により、国防写真隊の撮影実態を明らかにしました。これらの研究成果を報告書に収録し、特別展で公開しています。

報告書『アメリカ軍の無差別爆撃の写真記録』は、特別展図録を兼ねたもので、2012年2月18日に刊行されました。特別展の展示概要、東方社写真部撮影空襲被害関係写真と日本写真公社国防写真隊撮影写真のリストとともに、井上祐子「東方社のあゆみと新資料の歴史的価値について」、山辺昌彦「東方社と国防写真隊との撮影による空襲被害記録写真の歴史的意義」小山亮「東方社写真部が撮影した空襲被害関係写真—東京大空襲・戦災資料センターに寄贈された写真群を中心に」、石橋星志「日本写真公社国防写真隊撮影写真について」の論文も収録されています。

特別展は2012年2月18日～4月8日の会期中で、開館10周年記念特別展「東方社写真部が記録したアメリカ軍の無差別爆撃」として2階会議室で開催されました。会期初日の2月18日に「オープニング講演会」が会場で開催され、井上祐子「東方社のあゆみと新資料の歴史的価値について」、山辺昌彦「東方社撮影空襲写真の歴史的意義」、小山亮「東方社写真部が撮影した空襲被害関係写真」の3本の講演がありました。

東方社撮影写真の寄贈経過と研究経過を紹介した報告、山辺昌彦「東方社空襲写真の研究と特別展の開催」が『政経研究時報』No.15-4（2012年3月発行）に掲載されました。

東方社撮影空襲関係写真集『東京大空襲 未公開写真は語る』がNHKスペシャル取材班/山辺昌彦著で2012年8月10日に新潮社から発行されました。

2012年3月18日に放映されたNHKスペシャル「東京大空襲 583枚の未公開写真」が、2012年8月24日に山辺昌彦の解説を付けてDVDで発売されました。

『政経研究』第98号（2012年6月発行）に山辺昌彦「NHKアーカイブスに見る「平和のための博物館」・「平和のための戦争展」」が掲載されました。これはNHKアーカイブスのトライアル研究「放送における「空襲」認識の歴史的研究」の内、山辺が担当した部分の研究結果の発表です。

2012年3月10日にカメラアホールで「東京大空襲を語り継ぐつどい—戦災資料センター開館10周年」が開催され、安斎育郎さんの講演、稲葉喜久子さんの空襲体験談、戦災資料センター10年の歩みの紹介、証言映像作品の上映などがありました。

2012年3月24日に、開館10周年記念朗読劇「死んでもブレストを」が曳舟文化センターで上演されました。

「2012年夏の親子企画—みて!きいて!つたえよう!東京大空襲」が2012年8月15日～19日に、2階会議室で開催され、空襲体験者や学童疎開体験者の話、紙芝居、朗読がありました。

Tel : 03-5857-5631 Fax : 03-5683-3326
<http://www.tokyo-sensai.net/>

高麗博物館:東京・新宿区

特別企画展『韓国併合』100年と在日韓国・朝鮮人(後編)—在日と戦後社会」が2012年4月4日～8月26日の会期により開催されました。現在日本には約60万人の韓国・朝鮮人が住んでいます。朝鮮人はなぜ、どのように日本に渡航し、暮らすようになったのでしょうか。100年前の「韓国併合」以来の歴史的過程、特に植民地期の問題については2010年に「前編」として展示しました。今回「後編」では、在日韓国・朝鮮人の生活や権利の問題は、そのまま日本の社会の問題として共に考えるために、戦後の日本社会で在日韓国・朝鮮人が直面してきたさまざまな現実と課題を展示していました。図録を刊行しています。

Tel & Fax:03-5272-3510
<http://www.40net.jp/~kourai/>

葛飾柴又寅さん記念館:東京

戦争経験のある漫画家・作家たちが、終戦の日の記憶を漫画や文章で綴った展覧会、「私の八月十五日展—漫画家・作家たちの絵手紙」が寅さん記念館無料休憩室で2012年3月3日～25日の会期により開催されました。

Tel : 03-3657-3455 Fax : 03-3657-3418
<http://www.katsushika-kanko.com/tora/m/>

緑図書館:東京・墨田区

空襲・疎開体験資料展が1階展示コーナーで2012年3月3日～25日の会期により開催されました。空襲直前にアメリカ軍が撮影した本所の航空写真、「狩野光男氏が描く東京大空襲」、堀切正二郎氏空襲体験画、緑四丁目・亀沢四丁目などの戦災前の居住者を調べて再現した地図、学童疎開の写真などの緑図書館所蔵の空襲・疎開関係の資料が展示されました。

ミニ文学展：焼け跡から戦後を生きた作家たちが3階展示コーナーで2012年3月3日～25日の会期により開催されました。妻の実家のある本所の焼け跡から戦後文学を拓くことを決意した椎名麟三、本所で母子を失った喪失感から新たに戦後をスタートした芥川賞作家八木義徳、空襲時、寺島町から火の中を必死に逃げ、東京大空襲を記

録することに力を注いだ作家早乙女勝元などの作品を紹介していました。

すみだ文化講座 151 座談会「戦争のあった頃」が 2012 年 3 月 11 日に 3 階学習室で開かれ、斉藤昭一さんが「紙芝居「ゴロウの叫び」、「戦争と青春」の映画化にかかわって」について話し、黒木宏さんが「ニュース映画に見る空襲」について話しました。

Tel : 03-3631-4621 Fax:03-3631-4660
http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/library/annai/midori.html

千代田区立日比谷図書文化館:東京

2012 年度文化財企画展「東京—その復興の歴史」が 1 階特別展示室で 2012 年 7 月 17 日～9 月 2 日の会期により開催されました。震災や戦災からの復興の様子、東京オリンピック前後の町並みの変化などの写真パネルから、東京のまちの歴史を振り返るものです。図録を刊行しています。

Tel:03-3502-3340
<http://hibiyal.jp/hibiya/museum.html>

豊島区立郷土資料館:東京

2012 年度春の収蔵資料展「豊島の空襲 2」が 2012 年 4 月 13 日～6 月 16 日の会期で開催されました。構成は、豊島に空襲があった日、「国土防衛の戦士」として、米軍資料から見た 4 月 13 日空襲、区民が記録した空襲、発掘された 4 月 13 日空襲、体験者が描いた東京空襲で、開館以来の空襲関係の資料収集や研究成果を集大成するものでした。解説リーフレットを作成しています。

2012 年度夏の収蔵資料展&第 7 回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館協力展示が 2012 年 7 月 21 日～10 月 7 日の会期で開催されました。池袋モンパルナスのすずめが丘アトリエ村にかつて居住した藤本東一良氏の制作の軌跡をたどる「藤本東一良展 フランス近代絵画の光と色を求めて」とともに、学童疎開などについても展示していました。解説リーフレットを作成しています。

研究紀要『生活と文化』第 21 号が 2012 年 3 月 30 日に発行され、青木哲夫さんの「学童集団疎開 決定から出発まで」などが掲載されています。青木哲夫さんの論文は、開館以来の豊島の学童疎開についての調査・研究を集大成したものです。

2011 年度博物館講座「戦争と平和を考える博物館を見学しよう」が、平和と戦争をテーマとした各地の博物館の現状について学ぶとともに、1945 年 3 月 10 日未明の東京大空襲をはじめとする東京空襲の実相を伝えるため、2002 年に設立された「東京大空襲・戦災資料センター」と周辺の被災地の見学会を開催し、戦争体験継承講座を兼ねるとともに、参加者（区民）とともに豊島区の新しい博物館展示について考えるきっかけとしたいという趣旨で開催されました。第 1 回は、2012 年 3 月 4 日に講演会「平和と戦争を考える博物館について」が豊島区立勤労福祉会館 6 階第 7 会議室で、第 2 回が 3 月 11 日に見学会「東京大空襲・戦災資料センターと被災地を歩く」が

開かれ、講師はいずれも山辺昌彦東京大空襲・戦災資料センター学芸員でした。

Tel:03-3980-2351 Fax : 03-3980-5271
<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>

中野区立歴史民俗資料館:東京

「日の丸旗之助の作家 中島菊夫と中野の子どもたち—中野文芸館シリーズ」が 2012 年 7 月 21 日～9 月 2 日の会期で開催されました。中野区に住んだ漫画家中島菊夫は、戦時中は、国民学校の教師をしていました。疎開した学童にあてた『慰問新聞』に「驚宮だより」を書いて送りました。本展では、『慰問新聞』のほかに、戦時中の子供たちの絵画や代表作「日の丸旗之助」などの漫画資料も展示されました。

関連して、2012 年 8 月 11 日に、国民学校の教え子にあたる石井則孝さんによる講演会「日の丸旗之助 童台寺に籠もる—東京大空襲と児童・生徒の集団疎開」が開かれました。

Tel:03-3319-9221 Fax:03-3319-9119
<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/dept/407000/d005773.html>

早稲田大学大学史資料センター:東京・新宿区

2011 年度企画展示「戦地に逝ったワセダのヒーロー—松井栄造の 24 年」が東日本大震災の影響により延期となり、2012 年 3 月 21 日～4 月 21 日の会期により早稲田大学早稲田キャンパス 2 号館會津八一記念博物館 1 階企画展示室で開催されました。戦争の時代、若者たちにとってひとりのヒーローがいました。選抜 2 回、夏 1 回の甲子園優勝を果たし、ワセダのユニフォームで神宮を沸かせた松井栄造です。持てる才能を活かして可能性に挑戦し、多くの人びとに歓喜を与えつけたその個性は、けれども 1 発の銃声によって突如失われることになりました。本展では、松井栄造の遺書や、銃痕の残る鉄帽覆、戦地から尾崎一雄や兄に送った手紙などを展示しました。輝きに満ちた生の軌跡に戦争の爪痕が刻み込まれた松井栄造の 24 年をふりかえり、私たちの記憶から薄らぎつつある戦争の現実を、敗戦から 67 年の今、改めて問い直すものです。解説書を刊行しています。

Tel:03-5286-1814 Fax:03-5286-1815
<http://www.waseda.jp/archives/>

立川市歴史民俗資料館:東京

企画展「多摩地区と我が家の戦争・戦後の記録」が 2012 年 7 月 10～22 日の会期により開催されました。空襲を経験したまちとして、平和を願い、再び戦争の惨禍を繰り返さないことを誓う平和都市宣言 20 周年事業です。市民から寄贈された資料を用いて、立川の戦争の記憶をもつ資料を通して、戦争や平和とは何かを改めて考える一助にし、今一度平和の尊さを再認識するために開かれました。展示項目は、軍都立川、徴兵と出征、戦時下の暮らし、立川空襲、終戦・そして平和です。解説文と展示資料リストを掲載した解説資料を作成しています。

Tel:042-525-0860 Fax : 042-525-1236
<http://www.city.tachikawa.lg.jp/cms-sypher/www/section/detail.jsp?id=154>

パルテノン多摩歴史ミュージアム:東京

歴史ミュージアム企画展「街から子どもがやってきた―戦時下の多摩と学童疎開」が 2012 年 7 月 13 日～11 月 12 日の会期により開催されました。戦時中の多摩の寺院には、品川の山中国民学校の子どもたちなどが、学童疎開にやってきました。多摩の学童疎開を中心に、戦時下の村のようすや子どもたちのすがたを展示していました。子どもたちは、ホームシック、空腹、ノミ・シラミ、皮膚病に苦しんだり、水くみ、洗濯、脱走、焼夷弾の爆撃などの体験を重ねました。寺院やその周辺は協力しました。品川歴史館所蔵の疎開児童による絵画の原本も展示していました。

Tel: 042-375-1414

<http://www.parthenon.or.jp/rekishi/>

神代植物公園:東京・調布市

特別企画展「災いを乗り越えた植物たち―力強い生命力で人々を励まし、災害の歴史を今に伝える」が植物会館 1 階展示室で 2012 年 7 月 31 日～8 月 12 日の会期により開催されました。関東大震災、東京大空襲、広島と長崎への原爆投下、阪神・淡路大震災、そして、東日本大震災を取り上げ、それらの災いの中、生き延び、私たちに勇気と希望を与えてくれた植物たちを紹介し、人と植物との関わりについてあらためて考える展示でした。

Tel:0424-83-2300

<http://www.tokyo-park.or.jp/park/format/index045.html>

八王子市郷土資料館:東京

コーナー展「戦争と人々の生活―「国民精神総動員運動」がもたらした庶民生活の変化」が 2 階の展示コーナーで 2012 年 7 月 6 日～8 月 31 日の会期により開催されました。八王子市郷土資料館では毎年夏季に平和の尊さを伝えるために戦争と平和をテーマとしたコーナー展を開催しています。今年は「戦争と人々」をテーマに、戦時中、政府によって推進された「国民精神総動員運動」から始まり、勝利のために人や物が総動員されていった時代を、当時の八王子市内で配られたポスターやビラ、回覧板、写真のなど約 30 点の資料から紹介していました。展示は国民精神総動員運動が始まる 1937 年から 1944 年までの資料を時系列に沿って展示していました。政府が国民の精神意識を少しずつ戦争へと引き込み、やがて万民翼賛の国家総動員体制へと加速していく移り変わりが感じとれる展示でした。

関連して、講座「八王子空襲と戦時下の生活について学ぼう」が 2 階の集会室で 2012 年 8 月 14 日・15 日・16 日に開かれ、①紙芝居「八王子空襲」、②郷土資料館ガイドボランティアによる戦争体験の語り、③八王子空襲の体験談の語りがおこなわれました。

Tel:042-622-8939 Fax:042-627-5919
<http://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisetsu/28254/028261.html>

東村山ふるさと歴史館:東京

企画展「町の記録が語る戦時中の東村山」が 2012 年 4 月 28 日～7 月 8 日の会期により開催されました。東村山ふるさと歴史館では 2007 年度に企画展「あの日々の記憶―東村山の空襲と学童疎開」を、2008 年度に企画展「陸軍少年通信兵学校」を開催しましたが、戦時中の東村山全体を考えると全国的に特異な項目が多く、全てを考察するには不十分でした。今回の展示では、戦中に東村山町長であった小池喜八さんの日記や、兵事関係書類をはじめとする東村山町の公文書類を取り上げ、戦時中の東村山の様子について、1.警防団と東村山の空襲、2.東村山の軍関連施設と軍部隊の駐屯、3.東村山への疎開・錬成道場、4.隠された徴兵の記録―兵事関係書類、5.町長日記にみる戦時中の東村山の項目に分けて紹介していました。展示を通じ、戦時中の東村山を明らかにするとともに、記録の大切さを伝えていました。図録を刊行しています。

関連して、講演会「東村山村（町）兵事関係書類」が 2012 年 6 月 10 日に開かれ、山本和重さんが講演しました。紙芝居と講演の会が 5 月 27 日に開かれ、大井芳文さんが「紙芝居 南秋津の平和観音」を上演し、小俣光明さんが「平和観音建立と米兵遺族をたずね歩いて」と題して講演しました。

Tel:042-396-3800

<http://www.city.higashimurayama.tokyo.jp/tanoshimi/rekishi/furusato/index.html>

福生市郷土資料室:東京

企画展示「平和のための戦争資料展」が 2012 年 7 月 14 日～9 月 9 日の会期により開催されました。郷土資料室では、毎年終戦の日にあわせて戦争関連資料の展示会を開催しています。今回の展示は、日清・日露戦争から太平洋戦争にスポットをあて、戦時中の生活資料や戦地からの軍事郵便などから、福生と戦争の歴史について考えるものです。

Tel:042-530-1120

<http://www.museum.fussa.tokyo.jp/>

三鷹市教育センター:東京

「地中に埋もれていた『戦争』展」が三鷹市教育委員会教育センター 2 階で 2012 年 3 月 8 日～9 月 28 日の会期により開催されました。戦争の記憶を未来に伝え、平和について考えるために、市内の戦跡遺構から出土した戦時中の遺物などを展示するものです。戦時中、三鷹町を含むこの地域には、中島飛行機三鷹研究所や調布飛行場などの軍事施設があったため、1945 年 2 月 17 日に、武蔵野町にあった中島飛行機武蔵製作所を爆撃した数十機のアメリカ軍グラマン機が、大沢にあった高射砲陣地を狙った空爆をおこない、応戦した兵士 4 人が亡くなったほか、東京大空襲のあと

の1945年4月には、下連雀に住んでいた太宰治の家も被害を受けた空襲を受けるなど、終戦までに数度の空爆の記録があります。また、そうした空襲の標的となった軍事施設に関連した遺構や遺物などが発掘調査によって発見されました。2009年11月には、当時の調布飛行場の施設の一部に相当する、大沢グラウンドの整備に伴う発掘調査中及び工事中に、旧陸軍の戦闘機「飛燕」などのプロペラが発見されました。また爆弾の跡や、戦後進駐していたアメリカ軍が使用したとみられる遺物などが出土しました。これら発掘調査で発見された、戦跡遺構からの出土品の展示や、出土の状態などの写真をパネル展示していました。Tel:0422-45-1151 (内線:3315)
<http://www.education.ne.jp/kyoiku-center-mi/>

武蔵村山市立歴史民俗資料館:東京

ミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」が2012年3月10日～20日の会期により開催されました。空襲被害の歴史的事実を忘れないために、「東京大空襲」の後の4月に武蔵村山が空襲で受けた被害の記録や、残された戦争資料を展示し、当時の武蔵村山周辺の様子や人びとの生活の様子を紹介していました。2011年に続き2回目の開催です。Tel:042-560-6620 Fax:042-569-2762
<http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokukan/index.html>

川崎市平和館:神奈川

『川崎大空襲記録展』私たちのまちに「空襲」があった」が1階屋内広場で2012年3月10日～5月6日の会期により開催されました。平和館所蔵の川崎大空襲の写真パネルや実物資料、公文書館や地球市民かながわプラザ所蔵の空襲に関する資料を展示していました。

オープニングイベントが2012年3月10日に屋内広場で開かれ、子どもたちが、学校で、地域で、平和館で、平和について、学び・考えたことを発表する「親子で・来て・みて考える平和推進事業」、石田勝俊さん(川崎空襲体験者)、山田西大さん(疎開体験者・玉川国民学校)の話聞く「戦争体験を語る・聞く」、アニメ映画「ガラスのうさぎ」の上映がありました。

核兵器廃絶平和都市宣言30周年・平和館開館20周年記念「原爆展・特別展－原爆と沖縄戦」が1階屋内広場で2012年8月1日～26日の会期により開催されました。今回の「原爆展・特別展」では、平和の尊さについて改めて考えるために、「原爆と沖縄」に焦点をあて広島・長崎の原爆被害の状況を撮影した写真パネルのほか、沖縄戦やひめゆり学徒の写真パネルや現物資料を展示しました。

関連して、2012年度平和を語る市民のつどいが2012年8月11日に屋内広場で開かれました。Tel:044-433-0171 Fax:044-433-0232
<http://www.city.kawasaki.jp/25/25heiwa/home/heiwahome/>

横浜市史資料室:神奈川

展示会「占領軍のいた街－戦後横浜の出発」が横浜市中央図書館・地下1階ホール前ホワイエで2012年7月18日～9月17日の会期により開催されました。戦後の横浜は、アメリカ軍の司令部が置かれるなど、占領軍の重要な拠点となり、空襲で焼き尽くされた市街地の多くは、アメリカ軍に接収されました。接収によってさまざまな制約を受けた街並の一方で、横浜の人びとは復興を目指して暮らしていました。アメリカ軍の街と日本の暮らしが共存する姿こそが、戦後横浜の特徴でした。今回の写真パネル展は、占領軍と日本人それぞれが撮影した写真を通して、占領が終了してから、今年で60年を迎えたことを機に改めて占領下の横浜を振り返り、もう一度「戦後」という時代を考えるために開かれたものです。

関連して、「占領軍のいた街－戦後横浜の出発」が2012年8月18日に横浜市中央図書館ホール(地下1階)で開かれ、羽田博昭さんによるスライド上映「占領軍のいた街・横浜」や、栗田尚弥さんの「米軍にとっての横浜・神奈川」と大島英夫さんの「占領下の文化－映画・音楽・ファッション」の講演がありました。Tel:045-251-3260 Fax:045-251-7321
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/house/i/sisi/>

日本郵船歴史博物館:神奈川・横浜市

企画展「日米交換船とその時代」が2012年8月11日～12月9日の会期により開催されました。太平洋戦争中、全ての商船は国家の統制下におかれ、客船は陸軍、海軍に徴用され、なかには航空母艦へと改造されるものもありました。軍事徴用を一時解かれ、二か月の航海をした交換船がありました。交換船とは、戦時国際法にのっとり、「敵国」に残された人びとを中立国の港で交換し合った船のことで、その運航は、海運会社日本郵船に託されました。開戦時、相手国には外交官をはじめ、ジャーナリスト、企業駐在員、学者、学生など、数多くの自国の人びとが暮らしていました。交換船は、わずかな中立国を頼りに、国交が断絶する「敵国」から、彼らを安全にそれぞれの自国に帰すという歴史的航海をしたのです。またこの交換船には、経済学者都留重人や哲学者鶴見俊輔など、戦後日本を代表する多くの知識人たちが乗り合わせていました。本展ではこの交換船を中心に、太平洋戦争の時代に、船会社が果たした人道的支援の一端とともに、商船が戦争に巻き込まれていった時代背景も紹介していました。Tel:045-641-4362 Fax:045-211-1929

<http://www.nyk.com/rekishu/>

長野県立歴史館:千曲市

春季企画展「三つの大日向をたどる 長野県の満州移民」が2012年5月26日～7月16日の会期により開催されました。大日向村は全国に先駆けて満州への分村移民を決断します。1945年8月、ソ連の参戦と日本の敗戦により満州の開拓民は逃避行を余儀なくされ、大日向の人びともたくさん犠牲者を出します。南佐久郡大日向村か

ら満州大日向村へ、さらに軽井沢町大日向地区へと数十年の間に二つの村を拓いた「開拓者」の足跡をたどり、長野県から満州に渡った全国最多の3万数千人もの開拓者たちの心情に迫るものです。大日向開拓記念館の資料や開拓団死者名簿も展示していました。図録を刊行しています。

関連して、講演会が2012年5月27日に開かれ、上條宏之さんが「なぜ数多くの県民が満州に移民したのかー三つの大日向を事例として」と題して講演しました。体験者による証言「満洲を語る」が、(1)6月2日「三つの大日向を生きて」証言者 坂本幸平、(2)6月16日「第六次長野県満洲開拓団員のこと」証言者 牧野内生義、(3)7月7日「二つの祖国を生きてー中国帰国者二世の経験から」証言者 大橋春美、の3回にわたってありました。

夏季展「阿智村ポスターが語る戦争と宣伝」が2012年7月28日～9月2日の会期により開催されました。下伊那郡阿智村に国家総力戦時代のポスターが135枚も残されていました。70点のポスターを展示し、それらのポスターがどのように作られたのかを探るとともに、戦時下のプロパガンダ・ポスターとは何であったのか、どのようなメッセージを受け取り、戦争に向かったかを検証するものです。

関連して、講演会が2012年8月18日に開かれ、「ポスターに見る戦時下の暮らしー阿智村コレクションを中心に」と題して田島奈都子さんが講演しました。

春季企画展と夏季展の連続講座「昭和の戦争と信州」が以下の通り開催されました。

①「戦争は避けられなかったか」

6月30日 講師:青木隆幸さん

②「今語り継がなくてはならない、満蒙開拓の歴史」

7月14日 講師:寺沢秀文さん

③「長野県の歴史編纂と戦争との関わり」

7月28日 講師:福島正樹さん

④「招魂社・忠魂碑・陸軍墓地ー戦死者はどう祀られてきたか」

8月11日 講師:原明芳さん

⑤「戦前の庶民の暮らし」

8月25日 講師:岩下康夫さん

Tel:026-274-2000 Fax:026-274-3996

<http://www.npmh.net/>

松本市立博物館:長野

松本まるごと博物館連携事業「戦争と平和」展が市立博物館など市内4施設で2012年8月4日～31日の会期により、以下のように開催されました。市立博物館展示会「戦争と平和 松本にきた特攻隊」

15日、講演会「松本にやってきた特攻隊浅間温泉の疎開学童とふれ合った」

18日、対談「身近にある戦争遺跡を語るまるごと博物館の視点から」

旧開智学校展示会「戦時下の子どもたち開智国民学校の資料を中心に」=これのみ9月30日まで

5日、お話とコンサート

窪田空穂記念館展示会「戦争と歌人」

歴史の里展示会「写真で見る巣鴨プリズン2」

Tel:0263-32-0133

<http://www.matsu-haku.com/maruhaku/index.html>

揖斐川歴史民俗資料館:岐阜

企画展「戦争とふるさとの暮らし」が2012年7月17日～9月2日の会期により開催されました。日露戦争から太平洋戦争にかけて使用された、さまざまな日用品や戦地への手紙などの展示を通じて、戦争が暮らしにもたらした影響や平和の尊さを実感して貰うために開かれたものです。

Tel:0585-22-5373

http://www1.town.ibigawa.lg.jp/cms/contents_detail.php?co=kak&frmId=1300

柳津歴史民俗資料室(岐阜市歴史博物館分室):岐阜

「戦時下のポスターー兵士と家族」が2012年7月18日～9月2日の会期により開催されました。ポスターは、人びとに丈夫な身体をつくり強い兵士となること、傷ついた兵士やその家族を支えることなどを訴えかけました。当時の人びとがポスターを見て、いかなる思いを抱いたのか、思いを馳せるために、ポスターの中でも「兵士と家族」に関係するものに焦点をあて展示していました。

Tel:058・270・1080

<http://www.city.gifu.lg.jp/c/40120461/40120461.html>

静岡平和資料センター:静岡市

企画展「アフガニスタンは今ー武力で踏みにじられた美しい祖国と人々」が2012年1月27日～5月27日の会期により開催され、写真と伝統衣装などの実物資料が展示されました。

企画展「空からの戦争」が2012年6月8日～10月28日の会期により開催されました。今回の展示では、ピースあいち作成のパネル17点を展示することにより、空爆の歴史をたどり、「空爆は何をもたらしたのか」を見つめ直すものでした。静岡空襲の体験画とともに、静岡空襲死者の遺品や清水空襲のマグネシウム焼夷弾などの新資料も展示されました。

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>

Tel&Fax:054-271-9004

ミュゼふじえだ 藤枝市郷土博物館・文学館:静岡

博物館第103回企画展「戦時中の暮らしと遊び」が2012年6月9日～7月16日の会期により開催されました。戦争の記憶が遠のいてきており、戦争の体験と記憶を次世代へと伝え、平和の尊さを知るために、「平和への祈り」をテーマに開いたものです。市民から寄贈された藤枝ゆかりの資料を中心に、戦時中の生活用品や出征兵士の遺品、子どもたちの教科書・遊び道具・紙芝居などを展示していました。戦時下の家庭生活を実感してもらうため、体験コーナーもありました。戦争関係の企画展は2回目で1989年の第7回企画展

以来です。前回は図録を刊行していましたが、今回はありませんでした。

関連して、戦時中の食事試食会「すいとん・さつまいも入りご飯」が2012年6月24日に郷土博物館前広場で開かれました。歴史講座「アジア・太平洋戦争と藤枝」が、1回目「日本の空襲と藤枝」は6月17日に、2回目「子どもたちと戦争」は7月1日に、それぞれ枝村三郎さんらを講師に文学館講座学習室で開かれました。

文学館企画展、藤枝市岡部町出身の反戦画家・平野亮彩没後一年回顧展「平和への祈り 平野亮彩絵画展」が2012年6月9日～7月16日の会期により開催されました。

Tel:054-645-1100 Fax:054-644-8514
http://www.city.fujieda.shizuoka.jp/kyodomuse_index.html

桜ヶ丘ミュージアム:愛知・豊川市

「豊川海軍工廠展」が2012年7月21日～8月31日の会期により開催されました。桜ヶ丘ミュージアムでは、豊川海軍工廠や豊川の街にもあった戦争について知ってもらうために、毎年夏季に「豊川海軍工廠展」を開催しています。豊川市が寄贈を受け保管している工廠資料を順次公開するとともに、戦争体験者が描いた絵画や、戦時下の暮らしを伝える資料も展示しています。

Tel:0533-85-3775 Fax:0533-85-3776
http://www.city.toyokawa.lg.jp/enjoy/sakuragao_kamseum.html

四日市市立博物館:三重

学習支援展示「四日市空襲と戦時下の暮らし」が2012年6月15日～9月2日の会期により開催されました。平和学習の支援を目的に、忘れてはならない戦争の体験をわかりやすく伝えるために、四日市が空襲に遭ったことや、戦時中の暮らしのようすを、実物資料、防空壕や焼夷弾の模型、写真パネルで紹介しています。

Tel:059-355-2700
<http://www.city.yokkaichi.mie.jp/museum/>

浅井歴史民俗資料館:滋賀・長浜市

企画展「第10回終戦記念展—故郷・家族への想い」が郷土学習館1階展示室で2012年7月28日～9月2日の会期により開催されました。長浜戦国大河ふるさと博覧会開催中で狭いスペースでしたが、第10回の記念展として、これまでの展示会のエッセンスを展示していました。戦地から愛する妻や家族にあてた手紙、出征する夫への手紙、従軍看護婦の召集令状・遺髪・遺書、赤たすきなどを中心に150点以上の資料が展示されました。

Tel:0749-74-0101 Fax:0749-74-0101
http://www.city.nagahama.shiga.jp/section/azai_rekimin/

大津市歴史博物館:滋賀

第98回ミニ企画展「シベリア抑留の記録」が

2012年7月10日～8月19日の会期により開催されました。戦後にソ連軍の捕虜となり、多くの人がシベリアに抑留されました。今回のミニ企画展は、大津市内在住の抑留体験者が大切に残してきた戦前・戦後の資料や帰還後に書かれた思い出などを展示することで、あらためて平和の大切さを考えるものでした。

Tel:L077-521-2100
<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

栗東歴史民俗博物館:滋賀

特集展示「平和のいしずえ 2012—描かれた戦争」が2012年7月28日～9月2日の会期により開催されました。栗東歴史民俗博物館では、栗東市の「心をつなぐふるさと栗東」平和都市宣言をうけて、1991年度から毎年、戦争と平和をテーマとする「平和のいしずえ」展を開催してきました。これは市内外の所蔵者から提供された資料を通じ、近代以降の戦争の歴史と戦時下の生活を再現することで、地域の視点から平和について考えようとするものです。2009年～2011年はロビー展でしたが、2012年は久しぶりに第2展示室を使った本格的な展示会でした。「描かれた戦争」をテーマとし、とりわけ現在の栗東市継出身の日本画家、西田恵泉が従軍画家としてフィリピン・ルソン島に渡り、戦場の風景や兵士たちを描いたスケッチ類を中心に、恵泉自身やその周辺の画家たちの資料も展示し、戦争と平和について考えるものでした。展示資料目録を掲載した解説シートを作成しています。図録は作成していませんが、ホームページ上に展示解説集を公開しています。

Tel:077-554-2733 Fax:077-554-2755
<http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutsukan/>

大山崎町歴史資料館:京都

「第14回平和のいしずえ展」が2階研修室で2012年8月7日～26日の会期により開催されました。新たに提供された教科書をはじめ、大山崎の戦前、戦中の資料を、内容を丁寧に読み込んだキャプションとともに展示することで、当時を振り返り、平和の尊さを語り合う契機にするために開かれたものでした。

Tel:075-952-6288
http://www.town.oyamazaki.kyoto.jp/soshiki_view.php?so_cd1=40&so_cd2=135&so_cd3=0&so_cd4=0&so_cd5=0

京都市学校歴史博物館:京都

2012年4月28日～8月28日の会期で開催された企画展「人の心のあたたかさと、理くつなしの涙—一教師・大橋まりの記憶と記録」の併設展として「疎開の記録」が開かれ、学童集団疎開先で児童が描いた作品などを展示していました。

Tel:075-366-0033 Fax:075-213-3181
<http://kyo-gakurehaku.jp/>

南丹市立文化博物館と南丹市日吉町郷土資料館:京都

「戦争と南丹市 世代をこえて伝えるメッセージ」が南丹市文化博物館と南丹市日吉町郷土資料館の2館を会場にして、同時に2012年7月14日～9月17日の会期により開催されました。展示会では、地域や個人にとって戦争はどういうものであったのか、身近な視点から戦争を考えています。また、当時の様子を伝える展示品を通して日本がおこなった戦争について自ら考える場となるよう工夫して、平和を願う市民の心を永く後世に伝えたいとして開かれたものです。構成は戦地へ赴く人々 銃後のくらし 子どもたちのくらし 戦争の傷跡の4つで、学童疎開は日吉町郷土資料館のみで展示していました。文化博物館は初めての開催で日吉町郷土資料館は2回目です。図録を刊行しています。

関連して、体験講座「戦時中の食事とお話」が南丹市日吉町郷土資料館のかやぶき民家で、2012年8月11日に開かれました。

南丹市日吉町郷土資料館

Tel & Fax : 0771-72-1130

<http://www.be.city.nantan.kyoto.jp/hiyoshi-shiryokan/>

南丹市立文化博物館

Tel : 0771-68-0081 Fax : 0771-63-2983

<http://www.be.city.nantan.kyoto.jp/hakubutukan/>

向日市文化資料館:京都

夏のミニ展示「くらしのなかの戦争」展が2012年8月11日～9月9日の会期により開催されました。資料館では毎夏、戦争に関する資料を展示しています。今年も軍事郵便絵はがき、千人針、戦時中発行された子ども向け雑誌などの、市民から寄せられた所蔵資料を展示し、身近な地域の暮らしの中にあつた戦争を展示品を通してふりかえり、平和についてあらためて考えるきっかけとするものでした。

Tel:075-931-1182

<http://www.city.muko.kyoto.jp/shisetsu/shiryokan.html>

ピースおおさか 大阪国際平和センター:大阪市

「ピースおおさか収蔵品展」が特別展示室で2012年1月15日～7月17日の会期により開催されました。ピースおおさかは2011年9月17日に開館20周年を迎えました。前身である「大阪府平和祈念戦争資料室」の10年を含め、30年の間に府民・市民より寄贈された数多くの資料を収蔵しています。それらの収蔵品に刻まれた歴史の力は人びとの心に響きます。今回の収蔵品展では、昭和初期の激動の時代から大戦末期の空襲に至るまでの“モノ語り”について展示しています。戦争の時代を振り返り、平和の意味を考えるひとつの機会となることを願って開かれたものです。遠藤敬一さんのシベリア抑留体験画やシベリア抑留関係資料、大田健一さんの従軍したときの絵、矢野宏さんの大阪空襲と戦後の絵、毎日新聞社の空襲写真も展示しています。

「ピースおおさか収蔵品展Ⅱ」が1階の特別展示室で2012年8月1日～12月25日の会期

により開催されました。前回と同じ趣旨で、空襲パノラマ画、従軍絵画など写真・絵の資料約80点、奉安庫、1トン爆弾の破片などの実物資料約70点が展示されました。

開館20周年・大阪大空襲平和祈念事業「大阪大空襲を決して忘れない」が2012年3月4日に講堂で開かれました。常本一さんと矢野宏さんが体験を語り、そして語り継ぎました。

終戦の日平和祈念事業①「講演会と歌で検証する「戦争」と「平和」」が講堂で2012年8月4日に開催されました。第一部のモンテ・カセムさんの基調講演+対談では、“小さくてもキラリと光る国”スリランカに魅せられた、当センター理事もず唱平と、立命館大学国際平和ミュージアム館長にこのたび就任した、モンテ・カセムさんとのざっくばらんな対談により、日本とスリランカとの関係や、平和への示唆について明らかにしました。第二部はもず唱平の進行と、高橋樺子さんの歌、田中裕子のピアノによる歌のステージでした。

終戦の日平和祈念事業②「ヒロシマを忘れないー証言と紙芝居「はだしのゲン」」講堂で2012年8月5日に開催されました。第一部証言では、広島女子高等師範学校の生徒だった17歳の時、被爆した高木静子さんが語りました。第二部紙芝居では青空みかんさんが『はだしのゲン』全5巻を一挙上演しました。

戦争犠牲者追悼式平和コンサートが2012年8月15日に講堂+「刻の庭」で中学生による作文「平和の誓い」発表、キャンドルナイトなども開催され、平和を祈る8月15日に「刻の庭」であらためて、平和への想いをみつけようというものでした。

Tel:06-6947-7208 Fax:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

大阪人権博物館:大阪市

企画展 沖縄復帰40年「1972年5月15日・沖縄」がガイダンスルーム2で2012年4月24日～6月3日の会期により開催されました。今年には沖縄が日本に復帰してから40年。沖縄の状況は、どのように変わったのでしょうか。また、変わっていないのでしょうか。この展示では、1972年5月15日の沖縄復帰前後の沖縄の歴史と、大阪において在阪沖縄人、そして大阪府民が、沖縄復帰に向けてどのような取り組みをおこなったのかを紹介していました。沖縄の人びとが望んだ復帰のすがたを、40年後の現在、資料をたどりながら考えるものです。展示構成①アメリカ軍支配下の沖縄②大阪の沖縄復帰運動③復帰と「密約」④復帰後の沖縄です。

関連して、講演会「沖縄基地問題の歴史」が法政大学の明田川融さんを講師に、研修室で2012年5月12日に開かれました。

Tel:06-6561-5891 Fax:06-6561-5995

<http://www.liberty.or.jp/>

堺市平和と人権資料館:大阪

企画展示「平和市長会議加盟都市5000突破記念 原爆ポスター展」が2012年7月1日～9月

29日の会期により開催されました。核兵器廃絶に向けた市民意識を国際的な規模で醸成するためには、被爆の実相などをこれまで以上に広く世界に伝えていく必要があります。そのため、2011年11月、平和市長会議は加盟都市が5000を突破したことを記念し、原爆被害の実相などに関するポスターを作成し、8月6日や9日を含む一定期間に、全加盟都市をあげてポスター展を開催することを決定しました。平和市長会議の一員である堺市も、市民に核兵器がもたらした被害の実相を知ってもらい、核兵器廃絶と世界恒久平和を願う国際的な世論につながるよう、このポスター展を開催しました。

Tel:072-270-8150 Fax:072-270-8159
http://www.city.sakai.lg.jp/city/info/_jinken/

吹田市立平和祈念資料館:大阪

2012年平和祈念資料室企画展が2012年8月1日～15日の会期により開催されました。平和祈念資料室は9月3日、阪急南千里駅前の千里ニュータウンプラザへ移転し、「吹田市立平和祈念資料館」として、リニューアルオープンします。オープニング企画展「戦争と動物園」を開催するほか、現在の男女共同参画センター2階にてプレ企画展を開催しました。平和祈念資料室プレ企画展「戦争と動物園」では大阪市天王寺動物公園事務所から提供された、人気者だったチンパンジーのリタ、ありし日の動物たち、写真でつづる天王寺動物園の歴史などの、オープニング企画展の写真の一部を、プレ企画展「所蔵パネル展」では「原爆」「戦時中の食生活」「吹田空襲」「大阪空襲」のパネルを、それぞれ展示しました。

吹田市立平和祈念資料館

Tel:06-6876-7793 Fax:06-6873-7796

http://www.city.suita.osaka.jp/home/soshiki/div-jinken/jinken/event/_56229.html

箕面市立郷土資料館:大阪

企画展示「戦時生活資料展」が企画展示のコーナーで、2012年8月3日～9月3日の会期により開催されました。箕面市立郷土資料館では、1989年の開館以来（施設の移転で開催できなかった2006年は除く）毎年夏のこの時期に「戦時生活資料展」を開催してきました。平和を願う思いは、永遠に変わるものではなく、また変えるべきものではありません。そこで、戦後67年目の本年も、平和の尊さを祈念するとともに、戦争の悲惨さを風化させないため、「戦時生活資料展」を開催しました。この企画展は、戦地での兵士の戦いをテーマにしたものではありません。戦地に行かれた身内や知り合いの兵士の安否に思いを寄せ、空襲警報に怯える日々を過ごし、食べ物や衣類などの日常生活品の不足に苦労した、戦時中の人びとの生活をテーマとしたものでした。展示資料の多くは市民から寄贈されたものです。我国の今の平和が続くとともに、世界中から戦争がなくなることを願って開かれたものでした。展示資料目録を作成しています。

Tel:072-723-2235 Fax:072-724-9694

<http://www.city.minoh.lg.jp/kyoudo/kikakutenji>

html

姫路市平和資料館:兵庫

収蔵品展「戦時を生き抜いた女性たち」が2階展示室で2012年1月7日～3月25日の会期により開催されました。姫路市平和資料館は、市内外の方から太平洋戦争当時の現物資料の寄贈を受けています。この資料の中からテーマを絞って毎年収蔵品展を開催しています。今回は、「戦時を生き抜いた女性たち」をテーマに展示会を開きました。日中戦争が始まると戦局は拡大・長期化し、生活向けの資源がだんだん削られていきました。国民生活は「欲しがりませぬ勝つまでは」のスローガンのもと、欲求を抑えた耐え忍ぶ暮らしが始まりました。このような戦時下の暮らしを耐えるために「隣組」制度が作られ、住民の動員、物資の供給・配給、防空活動がおこなわれ、軍需工場への動員も求められました。婦人会の活動も多く、千人針、慰問袋、お守り、励ましの手紙などを作りました。終戦後はひどいインフレが発生し食糧事情も悪化、わずかな食糧を工夫して生き延びてきました。本展示は戦時下の女性の暮らしぶりを示す収蔵品を中心に構成し、写真資料約30点、実物資料約300点を展示していました。

展示項目と主な展示資料は以下の通りです。

『戦中の炊事と食卓』 主な展示資料：ちゃぶ台、たんす、火鉢、臼、ラジオ、急須、盃、皿、防空頭巾など

『戦中の家庭用品』 主な展示資料：そろばん、さお秤、財布、扇子、マッチ、ペン、足袋など

『自粛させられたおしゃれ』、『古着、古着で戦時衣料を再生する母』 主な展示資料：本、ものさし、カゴ、箱、縫製セットなど

『「隣組」の回覧板が生活を定める』、『慰問袋を作り、千人針を縫う母』 主な展示資料：回覧板、千人針、慰問袋、ぬい針など

『出征兵士を見送る大日本婦人会』 主な展示資料：郵便、絵葉書、手紙、通達、たすき、大日本婦人会旗など

『「お国」のために貯蓄する主婦』 主な展示資料：各種国債、年金証書、領収書、紙幣、給与袋、貯金通帳など

『配給切符を手配所に並ぶ主婦』 主な展示資料：生活証明書、衣料切符、食券など

『軍需工場で働く娘』、『焼け跡をたくましく生きる女性たち』 主な展示資料：保険証書、引揚各種証明、弔問電報、死亡通知、復員証明書など

主な資料コーナー 主な展示資料：奉公袋、ソロバン、食器、紙幣、はがき、アルバム、杯、ふろしき、模型など

関連して、柳川亘弘さんによる姫路空襲体験談が2階会議室で2012年2月11日に開かれました。

2012年度春季企画展「子どもと戦争」が2階展示室で2012年4月14日～7月8日の会期により開催されました。太平洋戦争下での子どもたちを中心に学校や家庭の暮らしや遊びの変化などを、約330点以上の実物資料や約50点の写真パネルを展示して、戦争の惨禍と平和の尊さを伝えるものでした。

展示構成は以下の通りです。

「家庭」

明治維新から戦時中にかけての社会情勢の変遷

大正から昭和初期にかけての庶民生活の変遷
戦争の足音が聞こえ始めてからの生活の変遷
昭和初期までの住まいの変遷

「学校」

学制発布ー寺子屋教育から全国規模の近代教育

義務教育の定着ー就学率の向上をめざして
学校行事と天皇制ー子どもから大人まで忠君愛
国の精神に

尋常小学校から国民学校へー軍国主義の色濃い
教育に変質

勤労奉仕と学徒動員ー戦争の犠牲になった子ども
たち

戦時童謡ー子どもたちの戦意高揚を無意識に植
え付ける

「遊び場」

駄菓子屋文化の誕生から衰退まで

子ども向け読み物・雑誌の登場ー軍国色の強化
おもちゃにも戦争の影響が表れる

戦争の影響は遊びにも

関連して、女優の駒田真紀さんによる、BGM
などを使った姫路空襲体験記朗読会が 2012 年 5
月 5 日に、法兼高政さんによる、姫路空襲体験
談を聞く会が 6 月 24 日にそれぞれ開かれました。

「非核平和展」が 2 階展示室で 2012 年 7 月
14 日～8 月 31 日の会期により開催されました。
姫路市では、1985 年 3 月 6 日の「非核平和都市
宣言」以来、その趣旨を広く市民にアピールする
とともに、非核平和について考える機会を提供す
るため、1986 年度から「非核平和展」を毎年開
催しています。核兵器の廃絶と世界の恒久平和を
願い啓発展示をおこないました。

内容は以下の通りです。

- 1 被爆資料の展示 46 点
- 2 被爆写真などのパネル展示 71 点
- 3 姫路市児童・生徒の平和への思いを描いた絵
画・書道作品展示 218 点
- 4 県立姫路工業高校デザイン科生徒の絵画作品
展示 10 点
- 5 ビデオコーナー 「ヒロシマに一番電車が走
った」
- 6 クイズラリー

関連して、姫路市児童合唱団による平和を共に
歌うコンサートが 2012 年 8 月 12 日に、姫路原
爆被爆者の会の中本宣子さんによる被爆体験談を
聞く会が 15 日に、それぞれ開かれました。

Tel:079-291-2525 Fax:079-291-2526

<http://www.city.himeji.lg.jp/heiwasiryoy/>

奈良県立図書館戦争体験文庫:奈良市

戦争体験文庫企画展示「赤十字ーその成り立ち
と展開」が 2012 年 1 月 4 日～3 月 22 日の会期
により開催されました。戦争体験文庫には、日本
赤十字社奈良班救護看護婦が、日中戦争・太平洋
戦争に従軍した際の貴重な体験記が残っています。

今回の展示では、手記を紹介する導入として、
世界や日本の赤十字の成り立ちや地域での展開、
看護教育との関わりについてみていきます。展示
資料リストを作成しています。展示構成と主な内
容は以下の通りです。

1. 赤十字ーその成り立ちと展開

今では献血や病院といったイメージの強い赤十
字は、もともと戦争の中から生まれました。
1859 年イタリア北部におけるソルフェリーノの
戦いで近代戦における戦傷者の悲惨さを目の当た
りにしたアンリー・デュナンは、国際的に認めら
れた負傷兵救護団体を主唱しジュネーブ条約に実
を結びます。日本においても、1877 年、西南戦
争を期に博愛社が組織され、日本赤十字社に発展
しました。

2. 日露戦争頃の篤志看護婦えはがき

看護婦への醜業視される傾向が日本においても
あったため、日本赤十字社による看護教育開始に
先立って、皇族や華族の女性を中心に篤志看護婦
が組織され、実際の看護にもあたりました。

3. 和歌山日赤における看護訓練、査閲光景

デュナンの協力者に近代看護の祖フローレン
ス・ナイチンゲールがいたように、赤十字と看護
には密接な関係がありました。日本においても、
看護専門職教育確立に赤十字は大きな役割を果た
しています。また、赤十字で養成された看護婦に
は、召集されれば救護看護婦として従軍する義務
がありました。戦前期において奈良には赤十字病
院がありませんでしたが、県民の志願者は和歌山
県の赤十字病院で委託養成されていました。日
中・太平洋戦争期には、こうした奈良班の看護婦
が病院船や野戦病院等で勤務しており、その手記
も残っています。

4. 南葛城郡中野家文書より総会関係資料

赤十字は、国から一定の独立性を維持するため
に民間から募った出資で運営されています。奈良
においても、県支部や郡単位での委員部が組織さ
れ、余興を交えた社員(出資者)大会が開かれてい
たのが中野家文書などから確認されます。

戦争体験文庫企画展示「8.15 で終わらなかつ
た戦争ー日赤奈良班看護婦の手記から①」が
2012 年 4 月 1 日～6 月 28 日の会期により開催
されました。戦争体験文庫には、日本赤十字社
奈良班救護看護婦が、日中戦争・太平洋戦争に従
軍した際の貴重な手記が残っています。今回の展
示では、終戦後中国に抑留され、国共内戦に巻き
込まれた方もいた第 459 救護班看護婦のうち、松
岡喜美子「第 459 救護班体験記」、居場花枝「記
憶を辿って」、福本裕照「抑留に思う」、安場ア
ヤ子「戦争と私たち」の 4 人の手記を紹介してい
ました。

戦争体験文庫企画展示「灼熱の陽の光の下でー
日赤奈良班看護婦の手記から②」が 2012 年 6 月
30 日～9 月 27 日の会期により開催されました。
今回は、シンガポールで山下奉文中将の看護にも
あたった助産師の手記、トラック諸島で激しい空
襲に巻き込まれながらも、辛くも生還した日赤看
護婦たちの手記を紹介していました。

Tel: 0742-34-2111 Fax: 0742-34-2777

[http://www.library.pref.nara.jp/sentai/kikaku.h
tml](http://www.library.pref.nara.jp/sentai/kikaku.html)

水平社博物館:奈良・御所市

全国水平社創立 90 周年記念 第 15 回特別展
「水平社運動・部落解放運動 90 年の歴史」が
特別展示室で 2012 年 5 月 2 日～8 月 31 日の会
期により開催されました。構成は、全国水平社の

創立、水平社運動の展開、部落解放運動の再出発、国策樹立へ向けて、部落差別とその現状、反差別の闘いへ、世界の人権問題で、差別糾弾と生活を守る運動の歴史を伝えていました。解説シートを作成しています。

Tel:0745-62-5588 Fax:0745-64-2288
<http://www1.mahoroba.ne.jp/~suihei/>

奈良市美術館:奈良

「原爆と戦争展—長崎の記録」が第1展示室で2012年8月22日～26日の会期により開催されました。奈良市では、1985年12月に奈良市議会で「非核平和都市宣言」が決議され、毎年広島・長崎に原爆が投下された8月6日と9日には、市内の社寺・教会などに呼びかけ、平和を祈願する鐘をつき鳴らすほか、各種の平和啓発事業を推進しています。そのようなことから原爆被災市である長崎市から原爆被災資料と写真パネルを借り受け原爆の恐ろしさと平和について考えてもらう機会として開催されたものです。

Tel:0742-30-1510 Fax:0742-35-7160
<http://www.museum.city.nara.nara.jp/>

和歌山城天守閣:和歌山市

企画展「空襲前後の和歌山城」が展示コーナーで2012年7月1日～9月2日の会期により開催されました。和歌山城は1935年に天守閣や楠門などが国宝建造物に指定されましたが、1945年7月9日の和歌山大空襲で焼失し、1958年に再建されました。企画展は公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団の主催で開かれ、1945年の和歌山大空襲で焼失する前後の和歌山城の写真パネルや焼けた瓦などが展示されました。

Tel:073-422-8979
http://www.city.wakayama.wakayama.jp/menu_1/gyousei/wakayama_siro/osiro/osiro.html

和歌山市立博物館:和歌山

コーナー展示「戦時下の和歌山」が2012年8月7日～9月30日の会期により開催されました。現在の国際社会を生き抜いていく上で日本が多く、の国と戦った事実を忘れてはいけません。再びこのような惨禍を繰り返さないためにも、この時代から学ぶべきことは多くあります。防空訓練、師範学校学生の農作業・行進などの写真と、生活統制のピラ、連隊の記念絵はがき、軍事郵便、子どもの本・学習絵図、紀州文化研究、国民服など戦時下の資料を展示し、この時代の一端を紹介していました。解説シートを作成しています。常設展の中で和歌山大空襲や戦時下の教育関係資料や代用品なども展示しています。

Tel:073-423-0003 Fax:073-432-9040
<http://www.wakayama-city-museum.jp/>

日南町美術館:鳥取

企画展「私の八月十五日—漫画家たちの終戦の記録」が2012年7月21日～8月26日の会期により開催されました。この展覧会は、戦争の時

代を生き、戦争の辛さや悲惨さを肌で感じた漫画家たちが、1945年8月15日の終戦日を境に時代が変わった瞬間の空気を描いた作品群の展示です。日本の漫画界を代表する94人の漫画家たちの複製原画124作品を展示しました。出品作家は、赤塚不二夫・鮎沢まこと・石川雅也・泉昭二・泉ゆきを・出光永・稲垣三郎・井上のぼる・猪俣昭良・今長谷はるみ・今村洋子・上田トシコ・ウノカマキリ・榎その・おおさわ匡・大下健一・大山錦子・おのつよし・笠根弘二・一峰大二・勝木てるお・木川かえる・キクチマサフミ・北見けんいち・木下としお・草原タカオ・工藤恒美・クミタリユウ・小島功・コタニマサオ・木乃美光・小山賢太郎・斎藤邦雄・さいとう・たかを・坂井せいごう・佐川美代太郎・五月かおる・サトウサンペイ・佐藤まさあき・里中満智子・さわたりしょうじ・篠田ひでお・柴田達成・白吉辰三・菅沼恭・杉浦幸雄・鈴木太郎・すずき大和・関根義人・平二郎・高井研一郎・高野栄二・武田京子・多田ヒロシ・田中正雄・田村久子・ちばてつや・千葉督太郎・土田直敏・永田竹丸・仲原白泡・檜喜八・西澤勇司・ハシヨシヒサ・はせべくにひこ・花村えい子・浜坂高一朗・原田こういち・バロン吉元・ばんば三郎・古谷三敏・牧野圭一・牧美也子・松本零士・水木しげる・水野英子・みつはしち、かこ・宮村正治・村野守美・森熊猛・森田拳次・森本清彦・モロズミ勝・矢尾板賢吉・やなせたかし・矢野功・矢野徳・山内ジョージ・山口太一・山根青鬼・祐天寺三郎・横山孝雄・吉田英一・わたなべまさこで、その他の執筆者は、石子順（評論家）・伊藤すま子（実業家）・永六輔（作家）・海老名香葉子（エッセイスト）・小沢昭一（俳優）・小野耕世（評論家）・黒田征太郎（イラストレーター）・清水勲（評論家）・高倉健（俳優）・田中扶士彦（実業家）・田村セツコ（イラストレーター）・長尾みのる（イラストレーター）・林家木久蔵（落語家）・廣田智代子（歌人）・町田典子（実業家）・丸山昭（編集者）・山田洋次（映画監督）です。

Tel:0859-77-1113 Fax:0859-77-1115
<http://culture.town.nichinan.tottori.jp/bijyutukan/bijyutukan.top.html.htm>

岡山市デジタルミュージアム:岡山

4階企画展第35回「岡山戦災の記録と写真展」が2012年6月15日～7月16日の会期により開催されました。1945年6月29日午前2時43分から4時7分にかけて、岡山市街地を目標とした大規模な空襲がおこなわれました。少なくとも1700人を超える死者がで、当時の住宅の約63%を失ったこの空襲は、どのように、何故おこなわれたのでしょうか。当時の資料や証言からこの空襲を考える展示会です。岡山空襲を語り継ぎ、2度とこの悲劇を繰り返さないために、「岡山戦災の記録と写真展」は1978年からはじまり毎年開催されてきました。今回は、岡山空襲で投下された焼夷弾、焼夷弾の部品類、レーダー妨害剥片、岡山空襲の高熱によって変形したガラスや陶器類、死亡証明書、罹災証明書、防空頭巾、灯火管制用カバー、防火用バケツ、非常用持出袋などの実物資料及び空襲前後の岡山市街地の写真

パネル類をなど、岡山空襲に関する資料や写真、アメリカ軍の撮影した岡山空襲に関連する画像、動画を展示していました。

関連して、記念講演会が4階講義室で2012年6月16日に開かれ、倉敷考古館学術顧問で、岡山空襲当時は岡山県第二岡山中学校の1年生で、網浜の学校寮に寄宿していた当時に岡山空襲にあい、学校の消火活動などに参加された、間壁忠彦さんが「岡山空襲当時のこと」と題して講演しました。

第4回岡山市平和コンサート「愛と平和の歌が2階のひかりの広場で6月16日に、福田浩子さん（ソプラノ）、大谷麻美さん（ピアノ）、桃太郎少年合唱団の出演により開かれました。

Tel:086-898-3000 Fax:086-898-3003
<http://www.city.okayama.jp/okayama-city-museum/index.html>

広島平和記念資料館:広島

2011年度第2回企画展「広島、1945一写真が伝える原爆被害」が東館地下1階展示室(5)で2012年2月3日～7月9日の会期により開催されました。1945年8月6日、世界で初めて、広島に原子爆弾が投下されました。原爆によって生じた熱線、爆風、放射線は、複雑に絡み合っ、広島を壊滅させ、多くの人を死に至らしめました。生き残った人も心と体に傷を負い、社会も大きな打撃を受けました。被爆から1945年末までに死亡した人の数は約14万人と推定されています。人びとはこの5か月の間にどのようなことに直面したのでしょうか。そこにはどのような苦しみがあり、また、どのような努力があったのでしょうか。今回の企画展では写真パネルなど108点、現物資料43点、映像2点を展示し、1945年末までの5か月間に撮影された写真を中心に展示し、死と生が交錯した被爆後の広島の姿と、そこで生きていった人びとの姿を紹介していました。

展示構成は次の通りです。

はじめに

1. 被爆前の広島
2. 爆心地に立つ
3. 死の街
4. 傷を負った人々
5. 市中へ 1
6. 市中へ 2
7. 傷
8. 生活をとりもどす努力 1
9. 生活をとりもどす努力 2
10. 残る傷あと
11. 死者を弔う
12. 原爆による広島の被災状況を撮影した人たち 1
13. 原爆による広島の被災状況を撮影した人たち 2

おわりに

資料展「被爆直後の報告書」が東館地下1階ホワイエで2012年3月1日～30日の会期により開催されました。日本政府が作成した広島・長崎の原子爆弾災害に関する唯一の公式報告書である「原子爆弾災害調査報告」全5冊（日本学術会議・原子爆弾災害調査報告刊行委員会編、

1951-53年刊行）が、2011年8月から11月にかけて順次復刻されました。この復刻にちなみ、また、開催中の企画展「広島、1945一写真が伝える原爆被害」との連携を図って、広島平和記念資料館が収集・保管している同報告書とその関連資料を紹介し、被爆直後からおこなわれた原子爆弾災害に関する調査活動を振り返るものです。

2012年度第1回企画展「基町一姿を変える広島開基の地」が地下1階展示室(5)で2012年7月13日～12月12日の会期により開催されました。

展示構成は次の通りです。

はじめに

1. 軍都の中心 1
2. 軍都の中心 2
3. 軍都の中心 3
4. 壊滅 1
5. 壊滅 2 原爆記
6. 被爆直前の基町と被爆直後の基町
7. 再建から再開発 1
8. 再建から再開発 2
9. にぎわいの場へ 1
10. にぎわいの場へ 2
11. そして、今

おわりに

Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館:広島市

企画展「しまつてはいけない記憶一家族への思い」が地下1階情報展示コーナーで、2012年1月2日～12月28日の会期により開催されました。1945年8月6日、一発の原子爆弾により、広島は街は一瞬にして破壊され、多くの尊い生命が無差別に奪われました。そして、生き残った人びともまた、家族とのつらい別れを体験したのです。迫りくる火の手に、助けることができないまま、亡くなった我が子、あの朝、「行ってきます」と元気に出かけたまま、行方不明となり戻ってくることのなかった姉、焼け崩れた店跡から、息子が贈ったベルトの金具とともに、発見された父の遺体、十分な治療が受けられず、ただ、苦痛に耐えて亡くなった母。体験記につづられた家族への思いは、今を生きる私たちの心にも強く訴えるものがあります。今回の企画展では、被爆者の「こころ」と「ことば」にふれるため、被爆の惨状と亡くなった家族への思い、平和への願いを、体験記を通じて紹介していました。体験記32編と関連資料12点、3面シアターによる映像(3編)を展示しています。

Tel:082-543-6271 Fax:082-543-6273

<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>

福山市人権平和資料館:広島

企画展「ヒロシマ・ナガサキ写真展」が2012年8月1日～31日の会期により開催されました。福山市人権平和資料館が所蔵する各種の「ヒロシマ・ナガサキ写真」を、組み合わせで展示しました。これらの写真を通して、「核」が人の「いのち・からだ・こころ・くらし」だけでなく、「地

域や文化」をも破壊することを訴えていました。
Tel:084-924-6789
[http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinkenh
eiwashiryokan/](http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/jinkenh
eiwashiryokan/)

徳島県立博物館:徳島市

部門展示「兵士たちの戦争」が部門展示室（人文）で2012年7月10日～10月8日の会期により開催されました。近代日本の歩み、とくに20世紀前半までのそれは、度重なる戦争の歴史でもありました。戦場となったアジア及び太平洋の広大な地域や日本国内で、兵士も市民も、大勢が命を失ってきました。この展示では、徳島県立博物館が収集してきた戦争関係資料のうち、戦場で用いられた各種の装備品や兵士の遺品などを中心に紹介していました。戦争の残酷さや平和の尊さについて考える機会とするために開かれたものです。展示構成は、(1)日露戦争と「戦争の世紀」(2)アジア太平洋戦争です。解説シートを作成しています。
Tel: 088-668-3636 Fax: 088-668-7197
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp>

高松市市民文化センター平和記念室:香川

「平和記念室 収蔵品コーナー」で「戦前・戦時下の人々が使用した医療関係の品々」の展示が2011年12月20日～2012年3月11日の会期により開催されました。
市民文化センターは施設の老朽化などに伴い閉館し、平和記念室も2012年3月11日をもって閉館しました。

多度津町立資料館分館:香川

夏季企画展「2012 戦争資料展」が2012年8月1日～31日の会期により開催されました。日本原水爆被害者団体協議会制作のパネル「原爆と人間」、多度津町における学童疎開の状況、岡田カメ女（一太郎の母の書）関係資料、兵役満期記念盃、出征兵士を送る、戦時中の苦難をしのぼせる資料、男児の健やかな成長と出世を願う行事ですが、武運長久の意味合いを含められた、「八胡の馬飾り」などを展示していました。
関連して、トーク「戦争体験者が語る 戦時の生活」と「すいとんの試食」が1階ロビーで2012年8月4日と18日に開かれました。
Tel & Fax : 0877-33-3343
<http://tkamada.web.fc2.com/shiryokan/kikaku/indexkikaku.htm>

飯塚市歴史資料館:福岡

「戦争と人々の暮らし展」が2012年8月2日～29日の会期により開催されました。平和教育の一環として戦時資料を展示して、戦時下の生活及び戦地へ出征した人びとについて紹介し、戦争の悲惨さと平和の大切さを考えるために開かれました。主な展示資料は、戦艦「金剛」の軍艦旗、元海軍飛行予科練習生の回顧録挿絵、飯塚市鯉田に墜落した少年飛行兵の資料、陸軍戦闘機「屠

龍」の資料、戦前のドイツで開催された冬季オリンピックの記念品や日本代表選手の写真、日本人が撮影したドイツ総統ヒトラーの写真などです。
Tel & Fax : 0948-25-2930
<http://www.city.iizuka.lg.jp/rekishi/index.htm>

大牟田市立三池カルタ記念館:福岡

平和展2012「戦中の生活と荒尾二造」が2012年7月3日～9月23日の会期により開催されました。戦時中、物資が不足し配給制や切符制になり市民の生活はとても窮屈なものでした。今回の平和展は、戦時中の生活用品や軍事に染まったカルタなど、当時を物語る資料を展示していました。また今回は、熊本県荒尾市にかつて存在していた東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所（通称・荒尾二造）という陸軍の火薬工場についても紹介していました。この展示はあらためて『平和』について考える機会になる事を願って開かれました。
Tel & Fax : 0944-53-8780
<http://三池カルタ・歴史.com/>

福岡市博物館:福岡

部門別展示室 1 歴史展示室で「戦争とわたしたちの暮らし 21」が2012年6月5日～8月12日の会期により開催されました。6月19日の「福岡大空襲の日」の前後に、館蔵の戦時関係資料を展示するシリーズの21回目。今回は、出征した人が故郷へ送った便り、銃後の人びとが出征した家族や「兵隊さん」へと送った手紙や慰問袋などを展示していました。解説シートを作成しています。
Tel : 092-845-5011 Fax:092-845-5019
<http://museum.city.fukuoka.jp/>

大刀洗平和記念館:福岡

かつて筑前町には、旧陸軍が東洋一を誇った大刀洗飛行場を中心とする一大軍都が存在していました。しかし、1945年3月の空襲により飛行場は壊滅的な被害を受け、また、多くの尊い命が犠牲となりました。その歴史を学び平和を語り継ぐために展示をしています。
大刀洗平和記念館 福岡県朝倉郡筑前町 417 - 3
Tel: 0946-23-1227
<http://tachiarai-heiwa.jp/>

長崎原爆資料館:長崎

2011年度第4回企画展「原爆を伝える一世代を超えて—いまも残る被爆樹木」が地下2階の企画展示室で2012年3月28日～6月20日の会期により開催されました。1945年8月9日午前11時2分、1発の原子爆弾で廃墟となった長崎。すさまじく、恐ろしい原爆の力は、街を彩る植物にも及びました。被爆した植物はどのようなのか。その樹木を見た人はどう感じたのか。傷を負った植物たちの被爆後の写真、そして現在の写真を展示しています。被爆から67年。私たちとともに現在を生きる、植物たちからのメッセージを伝えていました。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170
<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/peace/japanese/abm/index.html>

ナガサキピースミュージアム:長崎市

企画展「昭和 20 年 8 月 9 日の天気図」が 2012 年 7 月 24 日～8 月 12 日の会期により開催されました。保存されている天気図に「軍事秘」のスタンプが押されています。天気予報は、太平洋戦争が始まった 1941 年 12 月 8 日から一切の発表は中止され、再開されたのは終戦後、1945 年 8 月 22 日からです。この間 3 年 8 か月、国民は毎日の生活に関わる天気予報を知ることが出来ませんでした。長崎への原爆投下も、実は天気に深く関わっています。原爆を搭載した米軍機が第一候補地・小倉への 3 回に渡る投下作戦に失敗し、第二候補地・長崎へ向かった際目に飛び込んできたのは上空一面に広がる積雲でした。投下を諦め帰還しようとした、その時、一瞬雲の切れ間が現れました。そこは投下目標地点から 3 キロ離れた「浦上」でした。

Tel:095-818-4247 Fax:095-827-7878
<http://www.nagasaki.jp/>

長崎市立一支国博物館:長崎

第 10 回特別企画展「私の八月十五日展」が 2012 年 7 月 13 日～8 月 5 日の会期により開催されました。会期中には、「八月十五日の会」発起人の一人である石子順さんが講演しました。

Tel:0920-45-2731 Fax:0920-45-2749
<http://www.iki-haku.jp/>

長崎歴史文化博物館:長崎市

日中国交正常化 40 周年記念事業「私の八月十五日展」が 2012 年 8 月 8 日～9 月 2 日の会期により開催されました。「八月十五日の会」に参加する日本の代表的な漫画家・作家たち 127 名による終戦の記憶と心象風景を、イラストや絵手紙で紹介する展覧会でした。

Tel: 095-818-8366 Fax:095-818-8407
<http://www.nmhc.jp/>

長崎市歴史民俗資料館:長崎

「戦時中の暮らし展」が 2012 年 6 月 21 日～8 月 26 日の会期により開催されました。戦時体制下で、人びとはさまざまな統制を強いられ、日常生活に必要な物も手に入りやすく、代用品や代用食が作られました。紙芝居・食器・貨幣・紙幣・切手・葉書・教科書・防砂袋・防空頭巾など約 150 点を展示し、現在の豊かな生活と対比し、平和の尊さを考えるものです。

Tel & Fax:095-847-9245
<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/siryokan/>

大分県立歴史博物館:宇佐市

企画展「宇佐海軍航空隊と大分の戦争」が 2012 年 7 月 13 日～9 月 17 日の会期により開催されました。明治時代以降、日本は「富国強兵」「殖産興業」をスローガンに近代国家へと歩み始めました。その過程で、大分県下にも陸軍の連隊や海軍の航空隊などの軍事施設が置かれました。これらの施設をはじめ、県下には多くの戦争遺構や資料が遺されています。今回の企画展では、戦争末期には特別攻撃隊の出撃基地となった宇佐海軍航空隊を中心に、大分の戦争に関する資料を展示していました。県下に遺る戦争の遺構や資料を通して、戦争の犠牲になった方がたや体験された方がたの思いに触れ、戦争の記憶を見つめ直し、地域における戦争と平和を考えていくものでした。

Tel : 0978-37-2100 Fax : 0978-37-2101
<http://kyouiku.oita-ed.jp/rekisihakubutukan-b/>

薩摩川内市川内歴史資料館:鹿児島

ミニ企画コーナー「終戦記念展示 それぞれの戦争」が 2 階ロビーで 2012 年 8 月 7 日～9 月 2 日の会期により開催されました。取り巻く環境が戦時色になる中で、人びとがどのような暮らしをしていたかを紹介するものでした。

Tel : 0996-20-2344 Fax : 0996-20-2848
<http://rekishi.satsumasendai.jp/index2.htm>

沖縄県平和祈念資料館:糸満市

「絵本が語りつぐ戦世」が 1 階企画展示室で 2012 年 6 月 18 日～8 月 5 日の会期により開催されました。沖縄戦に関する絵本の絵を中心とした展示会で、儀間比呂志『戦がやってきた』、『沖縄戦一朝鮮人軍夫と従軍慰安婦』、宮良瑛子『忘れな石一沖縄・戦争マラリア碑』、『湖南丸と沖縄の少年たち』、安室二三雄『水をください』、宮城明『ずいせん一女学生たちの最前線』、『ハワイから来たブウちゃん』、磯崎主佳『火種をけすな』、『おじいの命くとうば』、本村佳奈子『シンプリーシナランドー』の 10 作品が展示されました。森山英子さん、南風原春子さんらによる絵本の読み聞かせ会が 2012 年 7 月 1 日に開かれました。

児童・生徒の平和メッセージ展が本館では 2012 年 6 月 23 日～7 月 6 日の会期により、八重山分館では 7 月 12 日～22 日の会期により、それぞれ開かれ、その後、名護市、うるま市、県庁を巡回しました。

沖縄の平和へのウムイ（思い）を県民の財産として沖縄県平和祈念資料館で発信し、沖縄戦の教訓を次世代に伝え、恒久平和の樹立に寄与することを目的とする、復帰 40 周年「子や孫につなぐ平和のウムイ事業」が糸満市、名護市、うるま市、那覇市、宮古島、石垣市を巡回して開かれました。

第 1 回子ども・プロセス企画展が 2012 年 6 月 13 日～7 月 16 日の会期により開催され、沖縄戦の悲惨な状況の中を生き抜いた国民学校や中学校の児童生徒たちに焦点をあて、当時の状況を展示しました。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947
<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/>

対馬丸記念館:沖縄・那覇市

第 18 回 対馬丸記念会特別展「絵日記に見る戦時疎開の子供たち—東京の子供たちの 600 日の記録」が 1 階企画展示室で 2012 年 8 月 18 日～25 日の会期により開催されました。
Tel:098-941-3515 Fax:098-863-3683
<http://www.tsushimamaru.or.jp/>

宜野湾市立博物館:沖縄

慰霊の日写真パネル展「沖縄戦と宜野湾」が 2012 年 6 月 13 日～7 月 1 日の会期により開催されました。沖縄戦について、宜野湾を中心に写真パネルを通して戦争と平和について考えるものです。
Tel : 098-870-9317 Fax : 098-870-9316
<http://www.city.ginowan.okinawa.jp/2556/2562/2563/2564/1419.html>

名護博物館:沖縄

沖縄復帰 40 周年記念事業 企画展「やんばるの戦争と三高女」が 2012 年 6 月 8 日～24 日の会期により開催されました。戦時下の写真や体験を描いた絵、証言集などを中心に紹介しています。また、野戦病院の遺品である軍用水筒や注射器など（南風原文化センター所蔵）も展示しています。関連して 6 月 9 日には、名護市史編さん係が主催する「第 18 回 高校生とともに考えるやんばるの沖縄戦」が開催され、北部の高校生や教師など、60 名を超える参加者が名護市内の戦跡巡りに参加して、戦争と平和について学びました。元なごらん会の方による講演会も、6 月 13 日と 19 日に開かれました。
Tel : 0980-53-1342 Fax : 0980-53-1362
<http://www.city.nago.okinawa.jp/4/3282.html>

育・医療の支援を受けているスリランカが日本をよく知る一方、日本人はスリランカの位置すら知らないような現状は一方通行だからです。東日本大震災後は、人の絆を大切に両国で国境を越え支えあう関係を構築しようと展示活動を続けてきました。

スリランカは 2004 年スマトラ沖地震により今回の日本と同じような津波被害を受けましたが、日本からの援助もあり、復興に至りました。今回、スリランカの子供達は、東日本大震災を知り、今度は自分たちが日本を力づけたいと Happy Factory の提案の元、津波被害や復興の様子、日本への応援メッセージを作成しました。絵は 200 点程にのびります。

Happy Factory は、それらの絵を日本全国に広めるため、大学近くのカフェやお店で展示を始め、8 月には、立命館大学国際平和ミュージアムにてロビー展示『「みてみて～！」で届ける国際エール』を実施しました。その後、たくさんの団体と共に活動し、宝塚や宇治でも展示をおこないました。そして、他団体を通じて福島避難所や宮城県の気仙沼、南三陸へも絵を届けました。最近では、2012 年 4 月 20 日～5 月 20 日まで、立命館大学国際平和ミュージアムにて、これらの絵を「過去・記憶」「現在・絆」「未来・希望」と時系列に沿って紹介し、併せて来場者と共にスリランカの子供達へ「ありがとう」のメッセージを書いてもらう参加型の展示、「スリランカからの贈り物—平和の祈りの木を咲かせよう」を実施しました。

国境や言葉、容姿や環境などの隔たりを越えて人々が通じあえる「絵」を通じ、人々が本来一番必要とするコミュニケーションを再認識できました。また、それは震災だけに終わらず、今後もずっとつながっていくことでしょう。

2012/06/01

Kayama Yumi

Happy Factory:

happyfactory.since2011@gmail.com

海外その他のニュース



Happy Factory 香山侑美

スリランカの子供達からの、東日本大震災を受けた日本に向けた絵やメッセージを展示していただけるスペースを Happy Factory は探しています。絵は 200 点程、国境を越えた子供たちのつながりや、異文化がダイレクトに表れた内容です。興味を持っていただける方は、happyfactory.since2011@gmail.com 香山侑美までご連絡ください。

Happy Factory は 2011 年 3 月、立命館大学生・香山侑美と国学院大学生・中林遼太が結成しました。目的は、スリランカの存在を日本に広め、両国関係を双方向型にすること。日本人による教

5・18 記念財団：韓国

インターン 山本美穂子
5・18 記念財団は、1980 年 5 月に起こった「光州事件」の被害者・遺族が 1994 年に設立した団体です。日本で「光州事件」として知られる光州民主化運動は、1979 年末に朴正熙大統領が暗殺された後、全斗煥をはじめとする新軍部のクーデターが発端となりました。光州のある全羅道は金大中の出身地でもあり、軍事政権に反対する声が高まっていました。最後は戒厳軍に制圧されたものの、“暴徒による反乱”ではなく、学生や一般市民の民主化運動であることを正当に記憶・継承し、民主主義と人権とが尊重される世界を 5・18 記念財団は目指しています。財団は教育部、交流部、資料調査部の 3 つの部署で構成されており、毎年 5 月には、「光州アジア・フォーラム」、「光州人権賞」を主催、受賞者と高校生のワークショップ等もおこなっています。学校教育で光州事件を取り上げてもらえるよう、教師のための勉強会や、詩のコンテストの開催、国内外の NGO を支援する基金も活動の一つです。光州事件の遺跡を

巡るガイド（日本語・英語）も育成しています。民主化運動を記念し、国より無償提供された跡地で開催中（11月まで）の光州ビエンナーレとも併せて、広く日本からのご訪問をお待ちしております。

ホームページ：

<http://eng.518.org/index.es?sid=a5>

The May 18 Memorial Foundation

5・18 Memorial Culture Hall 1F

152 Naebangro, Seo-gu

Gwangju 502-859

Republic of Korea

Tel: (82)62-360-0518 Fax: 62-360-0519

518org@gmail.com

孫文のペナン基地記念館：マレーシア

世界遺産に指定されている多文化都市ジョージタウンにある歴史的建造物「孫文のペナン基地記念館」では、1911年の辛亥革命を計画した孫文（サン・ヤット・セン）のペナンでの革命活動に関する常設展示をおこなっています。

The Sun Yat Sen Museum（孫文のペナン基地記念館）

120 Armenian Street

George Town World Heritage Site

10200 Penang, Malaysia

Eメール: sunyatsenpenang@gmail.com

ホームページ: www.sunyatsenpenang.com

子どもの平和センター：米国

子どもの平和センターでは、5～11歳の子どものために、遠足などの楽しい相互学習の場を提供しています。子どもたちは人形劇・ゲーム・工作・パソコン・ロールプレイング・討論・共同作業などを通じて、選択、問題解決、感情操作等の能力を身につけ、人格を養い、自分の行動に責任を持つことを学びます。

本年は第1回アクワース芸術祭に参加し、当センターのプログラムを移動展示車両「ピース・モバイル」内でじかに体験いただくことができました。また、「アースデー（地球の日）」にちなんで美術コンテストを開催し、「地球と仲良し」というテーマで地元の子ども達から作品を募りましたが、その応募作品も車内に展示されました。優勝者の作品が掲載されているカレンダーの販売もおこなわれ、その売上金は、今年の夏おこなわれる「ピース・キャンプ」への子どもたちの参加費用に充てられます。

Children's PEACE Center（子どもの平和センター）：

P.O. Box 379, Acworth, GA 30101, USA

Eメール: info@childrenspeacecenter.org

ホームページ：

<http://childrenspeacecenter.homestead.com/>

ノー・モア・ヒロシマ：ノー・モア・ナガサキ：平和博物館（インド）

2012年8月6日～9日、当館において『広島と長崎を忘れない』と題したイベントを開催しま

した。インド医師会、政治指導者、政策立案者を含め、子ども、女性、若者など幅広い層を対象に行われたこのイベントは、多大な反響を呼び、メディアでも大きく取り上げられました。（バルクリシュナ・カーヴェイ）

8月22日マンデラの彫刻：南アフリカ

ものごとはかなさや傷を負わせる行為とその結果を探る試み

アパルトヘイト博物館（南アフリカ）で現在進行中の「アフターマス（後遺症）プロジェクト」は、芸術を用いて一般の人びとに社会政治的問題を論じてもらおうとする「芸術的介入」プロジェクトです。探索的、独創的な諸々の方法により「人種差別によって受けた傷の後遺症」をテーマに、精神浄化作用を誘引し、対話を生み出すことが目的のひとつです。

彫刻・ビデオ・パフォーマンスの展覧会では、ファリーダ・ネズイエル（Farieda Nazier）氏がモッケ・ヴァン・ヴェウレン（Mocke J. van Veuren）氏やタミ・ヘクトル・マネケラ（Thami Hector Manekehla）氏と共同で制作した作品を紹介します。

当館は現在、ネルソン・マンデラ氏が逮捕されたクワズール・ナタール州でのプロジェクトを進めています。逮捕後、マンデラ氏はロベン島に27年間収監されました。当館はマンデラ氏が逮捕された場所に小屋を建て常設展示をおこなっています。レストラン、ミュージアムショップも併設されています。8月4日には同地で、南アフリカ共和国大統領ジェイコブ・ズマ氏により、マンデラ氏の彫刻の除幕式がおこなわれました。マルコ・シアンファネリの手になるこの野外彫刻作品は、高さ5～10メートルの鉄棒50本（マンデラ氏の逮捕から現在までの年数）で構成されており、特定の位置から見るとマンデラ氏の肖像が浮かび上がる仕掛けになっています。この偶像的作品は、マンデラ氏の逮捕された場所を示すとともに、主要な観光名所になるものと期待されています。

ブンデスヴェール軍事史博物館：ドイツのドレスデン

フィリップ・ゾントック博士

1877年以来ドレスデンにあるその建物は兵器庫か軍事博物館として使われてきた。それは改修工事後2011年10月14日にブンデスヴェール（ドイツ連邦軍）軍事史博物館として再開された。その目的は兵士の教育と人びとへの公開であった。

この博物館は決して戦争に反対する平和博物館として考えることはできない。しかし平和のための博物館として考えることはできる。例えば武器の使用による身体的精神的な傷を表したたくさんの写真がある。また戦争による経済的社会的影響も示している。

この博物館建設費には6200万ユーロが使われ、平和博物館の建設と比較すると考えられないような建設費である。1300年から今日のアフガニスタン戦争を含め、これまでの武器を集めている。軍事的行為はほとんど肯定的に示されていない。

核軍備は最大の脅威として示されている。ドイ

ツの核軍縮運動について取り上げ、原爆は生命にとって最大の脅威として示しているが、核兵器の影響に関する展示はほぼすっきり避けている。もし核戦争が起こったらどうなるのかを詳しく示せば、訪問者の印象は大きくなるであろうし、平和の尊さに気付くようになるであろう。

また1945年2月のドレスデン空襲が地元の人びとの記憶を通して生き生きと展示されている。また建物のデザインは、ドレスデン空襲を思い出させるようになっている。

博物館では、1999年以来貧困や環境による難民ほど戦争による難民は多くないと示している。緊急に社会的問題を解決するために対策を講じないと、平和は不可能である。

ところで兵士が服従を拒否することは長い間犯罪であった。この博物館の近くにグラフ・シュタウフェンベルグを記念した通りがある。彼は1944年7月20日にヒトラーを攻撃したリーダーである。もし彼の攻撃が成功していたら、何百万人もの戦争犠牲者が出なくても済んだであろう。軍隊では服従が求められるが、もし命令が間違っており、違法で倫理的でない場合、服従しないことが求められるようになった。(注：従ってドイツでは最近まで良心的徴兵制度が認められていた。)

この博物館では第二次世界大戦中の殺人、特にユダヤ人の虐殺を取り上げている。しかし核戦争、武器の輸出、宇宙の軍事化など本質的な問題をきちんと取り上げていない。だが単に軍隊を賛美するようなことはしていない。軍隊によって設立されたこの博物館を、「平和のための博物館」と呼ぶことができるかもしれない。博物館の冊子には、「兵士だけが紛争を予防したり解決することはできない」と書かれている。人間の尊厳や自由を含め、人間に必要なものが平和の前提条件であると述べられている。国際刑事裁判所のような国際ネットワークが必要であることも述べられている。

貧困撲滅を目指す異教徒間連盟：パキスタン

パキスタンには95%以上の人びとがイスラム教徒で、キリスト教徒やヒンズー教徒などはわずか2~5%である。8月17日にキリスト教の11歳の少女(ダウン症)がコーランのページを破ったということで逮捕され、投獄されました。またその家族やキリスト教徒である人びとの命が危険にさらされる状況であった。貧困撲滅を目指す異教徒間連盟では、イスラム教徒に攻撃されたキリスト教徒の家族の援助をしてきた。幸いその後その少女は釈放されましたが、それは多くの人びとの支援によるものである。その連盟の代表であるサジッド・イシャクさんは、平和のための博物館国際ネットワークの理事をされている。詳細はウェブサイトで知ることができます。(英文です)

Sajid Ishaq : Chairman

Interfaith League Against Poverty

House 2-A, St 55, F-8/4, Islamabad 44000, Pakistan

Tel: +92(51)285-5980-2 Fax: +92(51)285-5983

Email: chairman@ilappk.org Web:

www.ilappk.org, www.sajidishaq.ilapus.org

<http://www.pil.org.pk/index.php/press-releases/19-press-releases-on-press-conference-by-pil-and-ulema-council-august-2012>

ゲルニカ平和博物館：スペイン

8月14日にはゲルニカ空爆75周年記念行事が行われた。6月28日から10月14日まで国際子ども平和絵画展が開催されました。これはもともと被爆50周年記念行事として1995年に日本が始めたものである。 www.kids-guernica.org

10月7~8日には芸術・社会正義に関する第三回国際会議が開催され、テーマは「芸術、危機、社会的転換」である。西洋の社会における危機は、銀行の欲、政治的腐敗によるものである。私たちが仕事や家、食べ物があり、教育を受け、健康を維持するのは、基本的な人権である。しかし世界の多くの場所でこのような基本的人権が蹂躪されている。このような状況の中で、危機的な社会における芸術の役割について議論する予定である。芸術は何が起こっているのかを表現するだけで人びと、社会、文化を帰る際に重要な役割を果たすからである。

10月9~11日には芸術、記憶、民主主義に関する第一回国際会議が開催される。1937年のピカソの絵画「ゲルニカ」は、市民への空爆の野蛮さを避難した作品である。芸術的創造性、記憶、民主的制度について論議する予定です。関心のある方はご参加下さい。

*以下のアメリカの博物館に関する記事は、訪問後収集した情報です。(山根和代)

ベインブリッジ日系アメリカ人記念碑：アメリカワシントン州

米国ワシントン州ベインブリッジ島にある日系アメリカ人排斥記念碑は、このようなことが「二度とないように」造られたものです。1942年3月30日ベインブリッジ島に住む日系アメリカ人227人(三分の二はアメリカ市民)は銃剣のあるライフル銃を米軍兵士に突きつけられて、フェリーでシアトルに送られ、その後強制収容所に送られました。記念碑はベインブリッジ島のイーグルダイルという波止場に作られました。今後資金が集まれば、博物館を建設の予定です。

BIJAC Contact Information

Email: info@bijac.org

Mail: BIJAC, 1298 Grow Avenue Northwest, Bainbridge Island, WA 98110

Phone: 206-842-4772

Fax: 206-842-5649

<http://www.bijac.org/index.php?p=MEMORIALIntroduction>

全米日系人博物館：ロサンゼルス

全米日系人博物館は、日系アメリカ人の歴史と体験を、アメリカ史の大事な一部として人々に伝えていくことによって、アメリカの人種と文化の多様性に対する理解と感謝の気持ちを高めることを活動の目的としています。

全米日系人博物館は、日系アメリカ人の体験を伝えるアメリカで初めての博物館です。日系アメ

リカ人に関する遺物や写真、フィルム、文書の広範囲にわたるコレクションを集め、さまざまな展示や教育プログラム、ビデオ、出版物の作製を通して、日系アメリカ人の物語を、全米、全世界に伝えています。博物館は、三つの架け橋を築いていきたいと願っています。一つ目の架け橋は、日系人とあらゆる人種のアメリカ人の間、二つ目の架け橋は日系人と日本人の間、そしてその二つの架け橋をもとにした、日米両国の人びとの心に架かる第三の架け橋です。

JAPANESE AMERICAN NATIONAL MUSEUM

100 North Central Avenue
Los Angeles, California 90012
Tel: 213.625.0414 Fax: 213.625.1770
<http://www.janm.org/>

ターミナル・アイランド日系人記念碑：カリフォルニア・サンペドロ

カリフォルニアのターミナル・アイランドには日系アメリカ人の地域社会がありました。1942年に強制収容所に入れられたためにその漁村は除去されました。2002年に歴史を保存しようと記念碑が作られました。写真をウェブサイトで見ることができます。

Terminal Island Japanese Memorial
1124 South Seaside Avenue
http://lac.laconservancy.org/site/PageServer?pagename=terminal_island_memorial

寛容のための博物館：ロサンゼルス

この博物館ではホロコースト、そしてあらゆる形の偏見や差別の問題を考える教育施設です。ホロコースト生存者であったサイモン・ウェーゼンサル氏が中心になって創られました。博物館にはホロコースト関係者がボランティアでガイドをしており、学校として子どもの人権教育をするために教員が子どもたちを引率して訪問しています。イスラエルのホロコースト博物館と異なり、アメリカにおける人種差別、例えば日系アメリカ人に対する差別なども取り上げています。

Museum of Tolerance
Simon Wiesenthal Plaza
9786 West Pico Blvd (southeast corner of Pico Boulevard and Roxbury Drive)
Los Angeles, CA 90035
<http://www.museumoftolerance.com/site/c.tmL6KfNVLtH/b.4865931/k.C069/Visit.htm>

スクオーミッシュ博物館

この博物館ではピュージェット・サウンド湾周辺に生きるスクオーミッシュ先住民の歴史や文化に関するものを収集、保存し、教育に生かしています。2012年9月15日に開館しました。あらゆる年齢層の訪問者が彼らの歴史や文化を理解できるように、口述歴史、写真、工芸品、視聴覚機器を使っています。

なおペインブリッジ島にはシアトル酋長のお墓

がありますが、彼の演説は有名です。
『父は空 母は大地』より引用 寮 美千子
(訳) パウロ舎出版
1854年、アメリカの第14代大統領フランクリン・ピアスはインディアンたちの土地を買収し、居留地を与えると申し出た。1855年、インディアンの首長シアトルはこの条例に署名。
これは、シアトル首長が大統領に宛てた手紙の一部です。

ワシントンの大首長が 土地を買いだといってきた。
どうしたら空を買えるというのだろう？
そして 大地を。私にはわからない。
風の匂いや 水のきらめきを
あなたはいったいどうやって買おうというのだろう？

すべて この地上にあるものは
わたしたちにとって 神聖なもの (途中省略)
生まれたばかりの 赤ん坊が
母親の胸の鼓動を したうように
わたしたちは この大地をしたっている。
もしわたしたちが どうしてもここを立ち去らなければならないのだとしたら
どうか 白いひとよ
わたしたちが大切にしたいように この大地を大切にしたい。

美しい大地の思い出を 受け取ったときのまの姿で
心に 刻みつけておいてほしい。
そして あなたの子どもたちの そのまた 子どもたちのために
この大地を守り続け 私たちが愛したように愛してほしい。いつまでも。
どうか いつまでも。

<http://www16.ocn.ne.jp/~tana5020/siatoru.html>
(全文を読むことができます。)

Suquamish Museum
6861 NE South Street
Suquamish, WA 98392
(360) 394-8499
<http://www.suquamish.nsn.us/Museum.aspx>



刊行物

『ポーポキ友情物語 東日本大震災で生まれた私たちの平和の旅』
文・絵 ロニー・アレキサンダー エピック
2012

A5 64頁 日英バイリンガル

2011年3月11日の大震災が世界中の人々に大きな衝撃を与えた。私は震災を受けて、平和学を専攻とし、そして阪神・淡路大震災を体験した者として、自らにできることを探った。そこで、2006年に立ち上げたポーポキ・ピース・プロジェクト(ねこのポーポキと一緒に平和を感じ、表現し、創造することを目指す)の新たな活動しようと思った。

被災地での活動を始めるにあたって、特に考慮したことは、一方通行ではないこと、被災地も

世界も視野に入ること、誰でも参加できること、継続性のあること、お金をかけずに出来ること、ポーポキらしさ（五感・感性・想像力を使うこと）といったことだ。そこで、45 cm x 5 m の布に大きなポーポキを描いて、布と色とりどりのマジックを持って東北へ出かけ、布に自由に絵を描く活動を避難所等で始めた。「いのち」、「つながり」をキーワードに、被災地以外にも、神戸や大阪、グアム、チェコでも活動を行った。気付いたことは、布に描かれているすべての絵は「物語」であり、言わない・言えないことを含めて、嬉しいこと、悲しいこと、欲しいもの、好きなもの等を表している。

大震災で生まれた布との旅は、私たちの平和の旅となり、私たちの気持ちが現在 60 mを超える布に描かれている「物語」によってつながっている。その記録である本書は旅中に出会った数々の大切なことを忘れないためにも、明日に向かうためにも、ぜひ読んでいただきたい。



『原発事故の理科・社会』（新日本出版社）
安齋育郎著
市民ネットワークの全国交流会でも紹介しましたが、2012年9月に出版されました。



なお、本書の英語版（ステファン・スロウェイ訳）もありますので、ご入用の方は安齋科学・平和事務所（〒600-8216 京都市下京区東塩小路547-4 ステーションコートヤード 802、Fax：075-741-7282）にお申し込みください。本体価

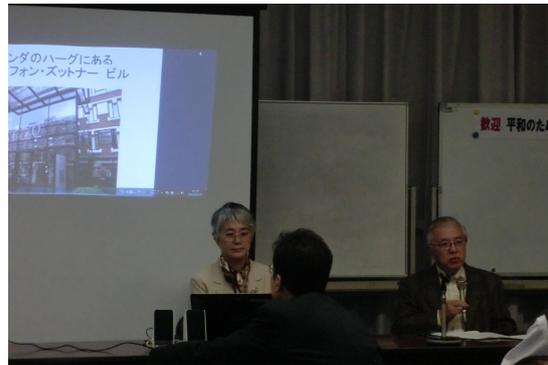
格 200 円 + 郵送料。

全国交流会の様子

2012年10月27・28日、京都の立命館大学国際平和ミュージアムで、「平和のための博物館市民ネットワーク」の第12回全国交流会が開催され46人が参加、多彩な活動報告に基づいて活発な意見交換や経験交流がおこなわれました。以下に、その様子を紹介いたします。



内容豊かな報告が続いた（10月27日）



国際ネットワークの紹介と入会案内も。



夜は楽しい夕食懇親会も開かれた。

〈平和のための博物館国際ネットワーク (INMP)〉に入会しましょう

2012年10月の全国交流会で新たに10人が入会！

— INMPの山根和代・執行理事＋安齋育郎・諮問理事からのお知らせ —

私たち山根・安齋両名は、2011年5月にバルセロナで開催された「平和のための博物館国際ネットワーク(The International Network of Museums for Peace: INMP)」の総会で、引き続き理事として再任されました。私たちは、皆さんが、個人あるいは団体として、INMPに加入されるよう心から期待しています。

これまで INMP の国際会議は、英国 (1992)、オーストリア (1995)、日本 (1998)、ベルギー (2003)、スペイン (2005)、日本 (2008)、スペイン (2011) と歴史を重ね、2014年には韓国で開催される予定です。改めて、このネットワークのことをご紹介します。

「平和のための博物館」とは、平和に関連した資料の収集、展示などを通じて、平和の文化を促進するための活動を営んでいる非営利教育機関の総称です。博物館や美術館や図書館など、形態はいろいろですが、そこでは、平和のために貢献したさまざまな個人や組織の活動の紹介や、平和についての歴史的な出来事に関連した写真・実物資料・イラスト・解説パネルなどの展示を通じて、平和と非暴力について人々に知らせる大切な役割を果たしています。また、INMPには、講演会・ワークショップなどの開催や資料の展示などを通じて平和教育に関わっている場所やセンターや機関なども含まれています。

こうした「平和に関連した博物館・美術館・場所・センター・教育機関・図書館」などは、「平和のための博物館」と総称されますが、INMPは、情報や知識や経験を交流し合い、互いに刺激し、励まし合い、支え合うことを通じて、互いの活動を強化し、世界平和に貢献することを目的とした非営利機関です。

私たちは「平和のための博物館」同士の協力を促進するため、国際会議の組織、情報メディアの十分な活用、出版活動への取り組みなどによって、これらの目的を達成することを強く願っています。もちろん、「平和のための博物館」にとって必要な研究・教育・訓練などに取り組むことも、大切な活動です。

INMPに加入しますと、次のような利点があるでしょう。

- ① 世界の平和博物館の情報に接するとともに、日本の取り組みを世界に紹介できます。
- ② 年2回(将来「年4回」)のニューズレター(通信)を受け取ることができます。もともとは「英語版」ですが、日本の会員には「日本語版」も用意されます。
- ③ INMPが開催する国際会議などの予定を知り、エントリー情報などを入手できます。
- ④ そして、なによりも、日本からの加入者が増えることは、世界の「平和のための博物館」関係者にとっての大きな励ましとなり、私たち自身も励まされるでしょう。

加入には特別の資格要件は何もありません。会費は年間2000円ですが、ご希望の方は下記宛ファックスまたは郵便でご連絡下さい。必要な情報をお送り申し上げます。日本の会員の名簿管理や会費の国際送金事務などは「安齋科学・平和事務所」が代行することが、2012年5月にハーグで開催された理事会で承認されています。

〒600-8216 京都市下京区東塩小路町547-4 ステーションコートヤード802

安齋科学・平和事務所 気付 INMP 係 (ファックス: 075-741-7282)